

概念体の構造 (完)

— 経済哲学のための構想 —

浦上博達

私たちの 19 世紀を特徴づけるのは、科学の勝利ではなく、科学に対する科学的方法の勝利である。
ニーチェ『権力への意志』より⁽¹⁾

科学者は、外部世界の実在の姿を漸次あらわにする研究方法を案出したと思われるだけでなく、科学的知識が、社会的ないし個人的影響による歪曲から例外的に自由となっているような、適切な形式の社会的組織を進化せしめたとも思われる……。マルケイ『科学と知識社会学』より⁽²⁾

目次

第 I 章 予備的考察

第 1 節 認識の「性質」問題

第 2 節 概念体の構造

1. 概念体の三層構造
2. 相互作用 (以上, 第 18 号)

第 II 章 三つの概念世界

第 1 節 意義の世界

1. 「意義」について
2. 形而上概念とは (以上, 第 19 号)
3. 形而上概念の要請
4. 形而上概念の役割
5. 共同体紐帯概念としての形而上概念 (以上, 第 20 号)
6. 形而上概念の形成 (以上, 第 21 号)
7. ヘゲモニー的形而上概念の衰退 (以上, 第 22 号)

第 2 節 論理の世界

1. 「論理」について
2. 論理概念とは
3. 論理概念の要請
4. 論理概念の役割 (以上, 第 23 号)
5. 論理概念の生成
6. 論理の世界の評価規準 (以上, 第 24 号)

第 3 節 経験の世界

1. 「経験」について
2. 経験概念とは
3. 経験概念の生成 (以上, 第 25 号, 一部, 本号)
4. 経験の世界の評価規準
5. 経験概念の役割

第 III 章 三つの概念世界の相互作用

第 1 節 意義の世界から

第 2 節 論理の世界から

第 3 節 経験の世界から (以上, 本号)

【経験概念の素材は感覚刺激と事物の存在である】 経験が概念を生成する⁽³⁾のは、個々の感覚刺激からであって感覚一般からではない。例えば「痛い」という概念は「痛さ」から導きだされる概念ではなく、何らかの神経刺激に貼り付けられた記号⁽⁴⁾が社会的なコミュニケーション過程を経て生成されたものである⁽⁵⁾。「痛さ」という概念は、「痛い」という感覚刺激から生成されるのであるが、概念の必要性は、感覚刺激を指示するためではなく感覚刺激の対象を確認し合うことにあり、このようなコミュニケーション過程を通じて刺激の記号は概念へと変容するのである⁽⁶⁾。したがって、経験（感覚刺激）と経験概念は等値されてはならない⁽⁷⁾。

【レッテル的記号と経験概念の相違は曖昧である】 経験概念⁽⁸⁾の生成は、事物に貼り付けられたレッテルとしての記号にあるとしても、レッテル的記号が、即、概念ではない⁽⁹⁾。それでは記号が概念化されるためにはいかなる要素を必要とするのであろうか。「心象」とか「印象」とか「観念」あるいは「感覚与件」⁽¹⁰⁾などは、記号が概念化されるための十分でも必要条件でもない。特に経験概念においては、概念は、コミュニケーション的作用を果たすが、本来、概念を含む記号自体がコミュニケーションを図るために使用されるのである。動物たちの叫び声は、仲間に危険を知らせるであろう。では、その叫び声は概念であろうか。つまり単なる記号（音声）が概念か、と問われればそうでもない。概念にとって記号は十分条件ではなく必要条件なのである。こうした問いかけは、「概念」とはなにか、という根本的な問いに引き戻される。その問いにいかように答えようと記号との明確な相違を見出すことはできない⁽¹¹⁾が、通常、概念は記号の一部であり、言語によって表現された記号であり名辞と称される。経験に限っても物理的な刺激に記号を貼り付けることは可能であるが、それは認識の素材に記号を付けたにすぎず、それが概念として使用されるさいには言語化が施される。そして言語化はその背後に言語体系を有している。危険を知らせる鳥の鳴き声（物理的的刺激）は記号（音声）であり、伝達内容を有しており、その伝達内容を他の鳥たちに伝えるが、その鳴き声は概念ではない⁽¹²⁾。それというのも、鳥たちは言語体系を有しておらず、その鳴き声は言語体系のなかで処理されることが叶わないからである。「キケン！」という叫び声はやはりその限りにおいては記号（音声）であるが、その音声言語体系に取り込まれたとき概念となる。ここでその音声に大きな変化が生じる。それは、言語体系に持ち込まれた瞬間、記号は記号として独立し、それまで表裏一体であった物理的的刺激から剥がされてしまうのである⁽¹³⁾。言語化するということは、言語的家族⁽¹⁴⁾に入ることであり、「キケン」という記号は「恐怖」とか「防御」とか「逃避」などの記号と家族的関係を持ちながら言語体系のなかで使用されることになる⁽¹⁵⁾。そしてこの言語的家族関係は社会的コミュニケーションのなかで形成されるのである⁽¹⁶⁾。

【経験概念の内包と外延】 概念は、通常、事物や事象のもつ多様な性質から特徴を取り出し（抽象化）、言語表現を与えたものとされる⁽¹⁷⁾。それにより、その特徴は意味内容（内包）となり、それらの事物や事象は適用範囲（外延）となる。したがって経験概念の十分かつ必要条件は、そ

の事物や事象が経験的なものに限定されていることである。そのため、その外延が経験的に空でなければ⁽¹⁸⁾ その内包は普遍化されていてもその概念は経験概念と呼ばれる⁽¹⁹⁾。

【概念は、経験概念の使用から始まった】 言葉は、通常、音声と意味と統語と共同体を有する⁽²⁰⁾ が、起源からすれば動作による音声から始まった。それゆえ、概念は経験概念の創出が最初である⁽²¹⁾。

【異常事例としての経験概念】 これまでの言説から、純粹な感覚刺激に対応した無垢の経験概念は存在しないことを述べてきた。つまり個々の感覚刺激は、私的であるが、それに対応する私的言語⁽²²⁾ は存在しないため、直接に感覚を表示する記号は存在しなくても言語化を伴う概念は存在しないのである⁽²³⁾。しかしながらもしそうだとすれば、その経験概念とはズレる現象の発見はいかにしてなされるのであろうか⁽²⁴⁾。ここに新たな経験概念の誕生の契機がある。とはいっても、これは未だ経験「概念」ではない。経験概念の前には事象の感覚があり、それが概念になるためには、やはり新たな解釈が施されなくてはならないのである⁽²⁵⁾。そしてそれが新たな概念体の構築への契機になる⁽²⁶⁾。

4. 経験の世界の評価規準

【経験の世界の評価規準】 経験概念は知覚の機能から生じるために、経験概念の判定は実際的な知覚に生じる効果に依ることになる。この意味でその効果を「実感規準」とよぶ⁽²⁷⁾。つまり、「熱い」という経験概念は、「熱い」という知覚によって経験的に確かめられるのである。しかしながら実用性という規準も依然保持していきたい⁽²⁸⁾。それというのも、実用性は「実感」の十分条件であるからである⁽²⁹⁾。

【実感規準は、身体によって判断される】 経験的知覚は、最終的には身体⁽³⁰⁾ がその判断者である⁽³¹⁾。

5. 経験概念の役割

【経験概念は、他の概念の母体という役割を担う】 記号はなんらかの使用のために用いられる。そして概念は記号の使用から生じるので経験概念がすべての概念の母体⁽³²⁾ になるのである⁽³³⁾。

【経験概念は現象と接触している】 経験概念は、現象地平⁽³⁴⁾ と接触しており、その現象地平から出生したその身分は現象地平によって支えられる⁽³⁵⁾。よって、我々の知識は経験概念によって出立し経験概念によって終わりとなる⁽³⁶⁾。

第三章 三つの概念世界の相互作用

本章では、われわれの思想（あるいは理論）を一組の概念の体系としてとらえ、そのような概

概念体が、形而上概念の世界・論理概念の世界・経験概念の世界という三層によって形成されているとして考察している。しかしながら、概念体はわれわれの概念の複合体であり、さまざまな概念は入り混じっており、明確に三層化されているわけではない。そこで以下の所論は、概念体を分析する⁽³⁷⁾ ために三層に解体された図式として扱う。そしてその三層に解体された世界⁽³⁸⁾ は互いに作用し合うが、それには積極的に他の世界に支配を及ぼそうとする支配的作用と他の世界に制約を課す禁止作用がある。

第1節 意義の世界⁽³⁹⁾ から

【「意義の世界」から「論理の世界」へ】

支配的作用：意味付与機能＝論理作業は、無内容で意義のおよび価値的には中立的に行われる。

論理内での作業は、それ自身の論理的推理にそって営まれるが、その出発点において方向性は論理の世界では決定されない。つまり、論理作業の出発時に、なにを公理とするかによって論理的推論はその方向を異にするのである。しかしながらどのような公理が選ばれるかについては、「論理の世界」の内部で決定することは不可能である。その方向は意義の世界からの指令によって示される。そしてまた、推論の作業過程においてもその方向性を保持するためにしばしば補助的な条件が設定される。こうした追加的条件の採用も論理の世界内部では選択できない。それをおこなうのが意義の世界である。最後に論理化された概念がどのような意義をもつのか、そしてそれがどのような使われ方をするのかについての指示も意義の世界から与えられるのである⁽⁴⁰⁾。

禁止的作用：枠付け検証機能＝論理的推論の枠組みは意義の世界から与えられるため、意義の世界は、論理が意義的にその枠を踏み外してまで推論を遂行することを禁止する。

【「意義の世界」から「経験の世界」へ】

支配的作用：統一化機能＝経験の世界は、特殊的で、局所的で、断片的であり、無秩序である⁽⁴¹⁾。そのような世界に統一性をもたせるのは、意義の世界である。意義の世界は、そこで掲げられた意義のもとで、経験を整理し⁽⁴²⁾、取捨選択し⁽⁴³⁾、統一するのであり、それによって経験は意義を付与される⁽⁴⁴⁾。

禁止的作用：選別検証機能＝すべての経験が認識にとって必要なものとは限らない。当の概念体にとってその意義にそわない不必要な経験概念は捨てられたり、あるいは矯正されたりすることさえある。また、その意義にとって不都合な経験からその身を守ることさえおこなわれる。

第2節 論理の世界から

【「論理の世界」から「意義の世界」へ】

支配的作用：形式整合化機能＝意義の世界は、価値の充満した世界であり、それは論理的な整合性を有していない。むしろ論理を超越していることが意義の世界の特徴である。しかしながらそれが概念体に持ち込まれるさいには概念の形式的整合性が求められる⁽⁴⁵⁾。論理の世界は、意義の世界に対して整合化を施すことになる⁽⁴⁶⁾。

禁止的作用：形式検証機能＝概念体は、論理的であることが必須条件であるために意義の世界の非論理要素が概念体に入り込むことを禁止する。

【「論理の世界」から「経験の世界」へ】

支配的作用：分析用具提供機能＝経験の世界を解明する⁽⁴⁷⁾ということは経験の世界が論理的に調理されるということである⁽⁴⁸⁾。そのため経験の世界を分析するために⁽⁴⁹⁾論理の世界で創出された論理概念⁽⁵⁰⁾がその分析用具としてあてられるのである⁽⁵¹⁾。

禁止的作用：論理的明証性検証機能＝論理の世界で創出された分析用具で経験が腑分けされるためにそれによって捨て去られるものがでてくる。

第3節 経験の世界から

【「経験の世界」から「意義の世界」へ】

支配的作用：地盤機能＝意義の世界の形而上概念の芽生え⁽⁵²⁾は、経験的な現象地平を地盤にする経験概念にあり、それが生⁽⁵³⁾の意志作用によって醸造される⁽⁵⁴⁾。こうして経験の世界は意義の世界の地盤を提供する。

禁止的作用：現実性検証機能＝意義の世界が最終的には経験の世界から支持（検証）されなければ、その概念体全体が空論に終わってしまう⁽⁵⁵⁾。

【「経験の世界」から「論理の世界」へ】

支配的作用：分析用具要請機能＝経験の世界は、無秩序で混沌とした世界である。そのため現象に対して直観的な対処はなしえても論理的な処理（説明）はそれ自身の世界では不可能である。そこで論理の世界に対して現象に形式を与える分析用具（論理概念）の創出を論理の世界に要請する。つまり現象を論理的に整理し、説明（コミュニケーション・予測）をなすための用具の開発を論理の世界に要請するのである。

禁止的作用：実用性検証機能＝経験の世界は、論理の世界で創出された分析用具（論理概念）が非実用的であることを禁止する⁽⁵⁶⁾。

（完）

〈注〉

- (1) [31] [下] <466> p. 13
- (2) [29] p. 60 訳書 p. 131
- (3) 「概念」という用語は、その使用法によってさまざまであり、共通の用語法がこれまでない。むしろ「概念」に対してどのような立場をとるかによってその論者の主張の基調が決まる。例えば、カント (I. Kant) にも概念についての詳述な説明はなく、「ここで私の言う『概念の分析論』とは、概念の分析でもなければ、また哲学研究において普通に用いられているところの方法、即ち与えられた概念の内容を分析することによってその概念を判明ならしめるという方法でもなくて、実に悟性能力そのものの分析である。」([21] [上] p. 139) として概念そのものの説明はない(私の本論文の意図は正しくここに存する)。カントによれば、概念は悟性から生じるのであって感性による直観とは区別される。先験的感性形式としての純粹直観は、空間と時間であるとされ、それらは、概念ではない。カントは、概念という語を対象の表象と関係づけて用いているが、空間や時間も概念であるという考えを完全に払拭できなかった。そのため、「空間概念」とか「時間概念」という言い方を随処で用いている。篠田英雄は訳注でこれについて注意を促す。「このようにカントの言う純粹直観としての空間は概念ではないのだから、彼が概念という語をしばしばかかる空間に関して使用するのは厳密な用語法ではない。なおこれは時間についても同様である。」([21] [上] p. 92) またカントの後のヘーゲル (G. Hegel) の概念 (Begriff) には経験的な要素は一切ない。ヘーゲルは、カントの経験概念の先験的統一という主張を超えて概念を純粹な自己意識の働きととらえ、概念は、それ自体で完結しており、対象は概念の「被措定有」とする。つまり、「概念は決してわれわれが作るものでなく、また概念は全く発生したものではないということである。概念は単なる有あるいは直接的なものでなく、媒介をも含んではいるが、しかし媒介は概念自身のうちにあるのであって、概念は自分自身によって、自分自身と媒介されたものである。まずわれわれの表象の内容をなしているさまざまな事物があり、その後主観的活動が行われ、そしてこの主観的活動がそれらに共通なものを抽象し総括する働きによって概念を作る、いう風に考えるのは誤りである。概念は真に最初のものであり、さまざまな事物は、それらに内在し、それらのうちで自己を啓示する概念の活動によって、現にそれらがあるような姿を持っているのである。」([16] [下] p. 130)
- (4) ラッセル (B. Russell) は、感覚与件について次のように述べる。「感覚において直接にしろれるもの、つまり色とか音とか、匂い、硬さ、粗さ、等々といったもの、これには『感覚与件』sense-data という名を与えよう。そして、これらのものを直接に知覚している経験は『感覚』sensation と名づけよう。そうすると、われわれがある色を見るときには、われわれは色の感覚をもっているわけだが、色そのものは一つの感覚与件で、感覚ではないということになる。」([40] p. 12 訳書 p. 15) ここでラッセルは、物的対象 (physical object) — 感覚与件 (sense-data) — 感覚 (sensation) という構図を描いているのである。つまり、物的対象 (実在) と感覚 (経験) との仲介として感覚与件を想定したのである。これはエイヤー (A. Ayer) に言わせれば、「感覚の直接所与は、知覚するものの心にある観念である、とするパークリの説を論破」([2] p. 72 訳書 p. 92) するためであった。しかし後年になって、ラッセルはライル (G. Ryle) の『心の概念』を取り上げて感覚与件という用語について次のように述べる。「私はすでに或る点についてかれの意見に似た意見を述べたことがあるので、まずそれを言うことにする。(省略) 私がかれに同意する第二の点は、『感覚与件 (sense-data)』をしりぞけるということである。私は一時感覚与件の存在を信じていたが、1921年に断然それを捨てた。」([41] pp. 180-181 訳書 p. 316) これは、心ということに関して「感覚与件」というような論理的对象を設定することの奇妙さに気づいたからである。しかしながらエイヤーによれば、『『感覚与件』ということばをつかうのは、なるほどやめたが、『所知 (percepts)』ということばは、ずっとつかっている。この所知は、感覚行為と相関的なものであるという性質だけはのぞいて、感覚所与に帰せられていた性質をすべて、持っているものということになっている。」([2] p. 73 訳書 p. 93) 感覚与件言語 (感覚与件言語については [50] p. 39 注(14)を参照) に対してカルナップ (R. Carnap)

は物一言語を主張した。「この前科学的 [引用者注：日常の言語] 言語と物理言語 [引用者注：論理—数学的用語に加えて非有機的な自然のプロセスを記述するに必要な言語] との共通の部分であるような部分言語は、物理学的な物一言語あるいは簡単に物一言語と呼んでいいだろう。われわれを取り巻く観察可能な (非有機的な) 事物の性質を語る際、われわれはこの言語を利用している。‘熱い’ や ‘冷たい’ のような用語は物一言語に属するものとみなせるが、‘温度’ は駄目である。何故ならば、その測定には技術的な道具の適用が要求されるからである。更に、‘重い’ や ‘軽い’ は物一言語に属するが (‘重量’ は属さない。) 他に物一言語に属するものは、‘赤’、‘青’…；‘大きい’、‘小さい’、‘厚い’、‘薄い’、…。これまで述べてきた用語は、観察可能な性質とでも呼ばれるようなもの、すなわち直接の観察によって決定できるようなものを指示している。」 ([5] pp. 52-53 訳書 pp. 45-46) つまり、物一言語とは、日常言語でありながら直接に観察可能な性質を表現した言語なのである。これはロック (J. Locke) が述べた事物の二次性質と軌を一にする。「本当は事物自身にあってはその事物の一次性質によって、すなわち、事物の感知できない部分のかさ・形・組織・運動によって、多種多様な感覚を産む力能であるにすぎないような性質であり、たとえば色、音、味などである。これを私は二次性質と呼ぶ。」 ([25] p. 135 訳書 [1] p. 188) このように事物の性質を一次性質と二次性質 (可感的性質) に区分したロックの狙いは、一次性質は実在的性質であって、二次性質はその一次性質の力能によって私たちの感覚に生じた観念であるということであった。「そうした [明るさや熱さなどの] 感覚を取り去ろう。目に明るさあるいは色を見せず、耳に音を聞かせず、上顎に味わせず、鼻に嗅がせないようにしよう。そうすれば、色も味も音もすべて、そうした特定の観念 (ideas) としては消えてなくなり、それらの原因に、すなわち [観念を産む物体の] 部分のかさ・形・運動に還元されるのである。」 ([25] p. 158 訳書 [1] pp. 192-193) ロックはこうした感覚による観念とそれに基づく内省からうみだされる観念とを用いて経験論を構築する。そしてその作業中、感覚の観念は判断に変えられることになる。「こうしたこと [引用者注：慣習的になること] は、多くの場合、ひんぱんに経験される事物では一つの固定した習性によって絶えず営まれるし、す早く営まれるので、私たちは、私たちの判断が作った観念であるものを感覚の知識とし、ひいては、一方すなわち感覚の知識は他方 [すなわち判断による観念] を喚起するだけに役だって、感覚の知覚自身はほとんど覚知されないのである。」 ([25] p. 146 訳書 [1] p. 206) カルナップも、後年、規約主義の立場からどのような規約でもそれに基づき十分な構文論的規則を備えてさえいけばいかなる言語も認めるという「寛容の原理 (principle of tolerance)」の立場をとる。これは、構文論の分野でのことではあるが、そうだとすれば、「物一言語」とする物理主義の立場であろうと「感覚与件一言語」とする感覚与件論の立場であろうと恣意的に言語を選択することが可能となり、それぞれが正当性を主張しうる。つまり、カルナップが提唱した物一言語もある一つの規約にすぎず、それによってカルナップが目指した「科学の言語の統一」はその規約の世界だけに通用する言語にすぎなくなるのである。ちなみに、カルナップと同じウィーン学団で物理主義者として形而上学批判運動を展開したノイラート (O. Neurath) は、カルナップとのプロトコル命題論争で直接経験の命題であるような純粋なプロトコル命題は存在せず、したがって科学の言語には常に不正確さが付き纏うとして有名な「ノイラートの船」の比喩を引いた。経験は知覚によるものであるから (大森莊蔵の用語を用いれば) 知覚像を表記した「知覚像語」 ([36] p. 160) が (大森が「概念」をどのように考えているか窺い知ることはできないが) 経験概念に相当する。「知覚像語」とは、日常語を転用することによって表現される。「簡単にいえば、日常語を知覚像語に転用するのである。

この転用を表現する手段として、特定の語を使うことができる。日常語命題の末尾にそれを設置して、“……とみえる”とか“……のごとくに思われる”ように書き、“……”の部分が知覚像語として転用されたことを表示するのである。」 ([36] pp. 186-187) そして「日常言語の転用としての知覚像語が描写するものはこの無垢な知覚像ではありえない。その描写は日常言語の世界解釈の投影のなかでの描写であるからである。だとすれば、これまで知覚像と呼んできたものは、この無垢で生の“直接所与”ではない。」 ([36] p. 188) 知覚像語が無垢でないということは、それは身分として単なる感

覚与件の単なるレッテルではなく概念であることを示している。つまり、知覚像語としての経験概念は無垢ではないのであり、無垢であるような記号は概念として成立せず、それゆえ知覚像語たりえないのである。なおカルナップは、科学の統一という運動から社会科学についても物一言語で表現されうると簡単に主張する。「扱われる最後の分野は社会科学である（これは前に指摘されたように広い意味におけるものであり、社会行動論と呼ばれる）。ここでは詳しい分析はいらない。何故ならば、この分野のすべての用語が他の分野の用語に還元可能であることは容易にわかるからである。人間やその他の有機体のグループの任意の探求の結果は、そのグループ、メンバー間の関係、環境との関係によって記述することができる。それ故、任意の用語に関する諸条件は、物一言語を含む、心理学、生物学の用語によって定式化できる。多くの用語がそれにもとづいて定義することさえできるし、残りのものがそれに還元できることも確かである。」（[6] p. 59 訳書 p. 51）本論文はこのような立場とは正反対の立場に立つ。それは、すべての分野で知識には形而上概念が含まれているし、経済学に関する知識では自然に関する研究分野よりもなおさらその色彩は濃厚であるからである。

- (5) 日常言語学派として知られるライルは、デカルト (R, Descartes) 的な心身二元論を「機械の中の幽霊のドグマ」 ([42] pp. 15-16 訳書 p. 11) と名づけて批判するなかで「感覚」があたかも心の中で存在するかのような用語法を非難する。二元論者は心の世界を設定し物的世界とのアナロジーによって論を進めてゆきその結果、「感覚を観察する」というような物言いになるのであるとする。つまり心に関する概念を事物に関する概念と同列に使用することの誤用、すなわち「カテゴリー錯誤」を指摘したのである。（[42] p. 16 訳書 p. 12）
- (6) [50] p. 41 注(17)
- (7) 「生」の内面的・直接的体験を基礎として精神科学を基礎づけようとしたディルタイ (W. Dilthey) はこのことに気づいていた。「ディルタイは実証主義を超えて成長し、実証主義の経験概念が、理想主義の理性概念を一面的なものとして拒けた時と全く同じように、一面的で偶然的であることを認識する。つまり、精神科学によって培われていた彼の眼は、ここでも自然科学に特有の経験概念が、独断的に経験そのものと等値されていることを見抜いたのである。」 ([4] p. 49)
- (8) カルナップは、科学の言語について次のように述べる。「科学の方法論についての議論においては、科学の言語を二つの部分、すなわち観察言語 (observation language) と理論言語 (theoretical language) に区分するのが普通であり有益でもある。観察言語は、観察できる事物または事象を記述するために、観察できる性質及び関係を指示する用語 (terms) を用いる。他方、理論言語は、観察できない事象、事象の観察できない側面または特徴——たとえば、電子や原子のような微粒子、物理学における電磁場や重力、心理学におけるさまざまな種類の動因や潜在能力、等——に言及するであろう用語 (terms) を含んでいる。」 ([6] p. 18 訳書 p. 192) しかしながらここでカルナップが用いている「言葉 (language)」と「用語 (terms)」との相違はなんであろうか。「用語 (terms)」が単なる記号 (しるし) を意味しているのであれば、それ以上の意味をもつ「言葉 (language)」は、その背後になんらかの内容を有していることが想定されている。とすれば、言葉はすでに概念である。例えば「電磁場」という理論言語は観察できない理論的内容を有している概念である。つまり理論言語とは内包を有するが外延は有さない用語である。そうなると、形而上学的用語との相違はなんであろうか。外延の存在が予想されるという可能性によるのであろうか。もしそうであるならば、観察可能性とはどのような条件が整えば成立するのであろうか。このようないくつかの疑問が生じる。いまだ外延は持たないが、意義とか価値とかを有さず論理的にその内包が呈示される用語はむしろ論理概念なのである。もしその外延が示されることができたならばその論理概念は経験概念として用いられることになる。このように言語を分類することは、それがどのような性質の概念なのかで分類することなのである。
- (9) 論理的には、言語的判断形式において主語および述語として思惟される意味内容が概念であり、その言語的表現が名辞とされる。形式論理学上での概念の取扱いを簡単に述べれば、判断形式における名詞が概念とされている。（[30] p. 26）伝統的形式論理学では、「主語—述語」の形を判断と呼び、

述語になる言葉もすべて事物とか実体とかを示すものと想定されており名詞以外の単語も、すべて名詞の形になおして考えられる。(例:「この花は、赤い。」は、「この花は、赤いものである。」「太郎は、花子を愛する。」は、「太郎は、花子を愛するものである。»)これは定言シロリズム(三段論法)において、媒介となる語を同一にするためである。そしてこのような命題における名辞が概念とよばれている。しかしながら概念は、名辞とは異なり、複数の事物や事象の共通の性質を取り出して(「概念」のラテン語は *conceptum* であり、これは「一つにして掴まれたもの」ということである)、それらを包括的に捉える思考の構成単位とされている。それゆえ、概念は、内包と外延(空集合も含めて、例えば「丸い三角形」という概念)を有している。しかしながら概念という用語は、論者によってさまざまな用いられ方をしており、その用いられ方はその論者の立場を決定している。その典型例としてヘーゲルは、その事物の本性または本質をその事物の概念と呼び、この概念はただ思惟に対してのみ存在するものであるとする。つまりヘーゲルにとっての概念(*Begriff*)は、論理学の対象であり、物(*Ding*)ではなく事柄(*Sache*)であり、それは内面的で本質的なものであった。そしてヘーゲルの論理学は、このような概念の弁証法的な自己運動そのものなのであった。こうした「概念」の言葉としての用いられ方は本論の立場と全く異質なものである。なお、哲学的な用語としてラテン語の動詞 *concipere* の過去分詞を *Begriff* と翻訳したのはライプニッツ(*G. Leibniz*)であり、彼は、カルテシアン(*Cartesian*)の用語法のなかで用いられる *conception* の産物としての *idea, notion* に抗して「事柄の表意」という意味で用いた。さらに記号論理学では、単称命題:「*a* は、人間(*F*)である」→*F(a)* では、*F()* の述語部分が概念であり、*a* は個体変項とされる。また経済学との関連で一言付け加えれば、弁証的唯物論の立場では、概念は事物の本質的な性質や連関の思考における反映とみなし、具体的なものと抽象的なもの、個別的なもの一般的なものの弁証法的統一過程を人間の認識の発展とみなす。労働価値学説における抽象的人間労働という概念がまさにこれに相当する。

- (10) 既述したように、「感覚与件 (*sense-data*)」とは、感覚するものであり感覚ではない、とされている。ラッセルによれば、感覚与件の「色は、われわれが直接に知覚するものであり、その知覚それ自体が感覚である。」([40] p. 12 訳書 p. 15) 感覚とは生理学的刺激のことであり、その刺激そのものが経験であって「感覚与件」が経験ではない。つまり、色があるから経験するのであり経験したある種の刺激が色ではない。
- (11) 「言語ゲーム」の概念の定義についてウィトゲンシュタイン(*L. Wittgenstein*)が述べた文章のなかの「ゲーム」を「概念」に置き換えて借用すれば以下ようになる。「一体、概念(ゲーム)という概念は如何に閉じられるというのか? 何がなおも概念(ゲーム)であり、何がもはや概念(ゲーム)ではないのか? 君は概念(ゲーム)という概念の境界をはっきり言う事が出来るか? 出来ないであろう。君は概念(ゲーム)という概念に境界を引く事は出来る; 何故なら、概念(ゲーム)という概念には境界は未だ全く引かれてはいないのであるから。(しかし、君がこれまで『概念(ゲーム)』という語を用いたとき、この、概念(ゲーム)という概念には境界は未だ全く引かれてはいない、という事が君を悩ます事は、全く無かったのである。)([53] 68 p. 58) 続けて、「人は、『概念(ゲーム)』という概念はぼやけた境界を持った概念である、という事が出来る。—[対話者は言う。]『しかし、ぼやけた境界を持った概念は、そもそも概念なのか?』—[ウィトゲンシュタインは言う。]おそらく君は、問うであろう: シャープでない肖像写真は、そもそも肖像写真なのか、と。確かに人はシャープでない肖像写真をシャープな写真で置き換えた方が、常に好ましい結果を得る事が出来るのか? シャープでない肖像写真こそが、しばしば、当に我々が必要とするものではないのか?」([53] 71 p. 60)
- (12) ジュウシマツの歌の研究から岡ノ谷一夫は次のように述べる。小鳥の「歌には意味はなく、伝達意図しかない」([33] p. 114) なお、岡ノ谷は、人間の言語起源論について、内容(意味)と形式(文法)が独立に進化するという「独立進化仮説」を提唱する。「これ[引用者注: 直列進化仮説=最初に特定の意味内容を差し示すシンボルが成立し、次いでこれらを組み合わせる(文法)新たな意味を作り出せるようになる]に対して、独立進化仮説によれば、意味と文法は独立に進化する。意味に

関しては、シンボルと事物の関係性を社会が共有することで、進化してゆくことは可能である。いっぽう文法については、歌やダンスなどの複雑な時系列行動が性的ディスプレイとして進化してゆき、そのような行動を支える神経機構が、後に言語の文法を支えるものとして流用されたのかもしれない。」([33] p. 110) 岡ノ谷の主たる関心は、ヒトがなぜ文法をもつようになったのかということにあるので、これ以上「意味」については立ち入らないが、「概念」の成立に関心のある本論文では、「シンボルと事物の関連性を社会が共有する」過程が重要となる。そして「意味」を有する言葉として概念が成立するためには、言語形式(文法)を直立的にしる独立的にしる獲得していなければならない。言語形式(文法)を有していない社会では、いかに社会的動物であっても概念は発生しないのである

- (13) フーコー (M. Foucault) は、「^{ランガーシュ}言語は、表象が外に出されるときではなく、表象が意図的に自己からある記号を分離し、そこに^{ランガーシュ}言語によって自己を表象させるとき生まれるのである。」([11] p. 132) と述べる。また、「つまり、この動作による^{ランガーシュ}言語を構成する諸要素(音、身振り、顔の歪み)は自然によってつきつきと提供されるのだが、それらの大部分は、その指示するものと内容上のいかなる同一性ももたず、ただなによりも同時もしくは継起の関係をもつにすぎない。叫びは恐怖に似ていないし、さしのべた手は飢えの感覚に似ていない。(省略) それらは、その指示するものの本性を表現しはしない。両者のあいだに類似はないからである。」([11] p. 132)
- (14) ウィトゲンシュタインが述べた「家族的類似性 (Familienähnlichkeit)」である。([53] 67 p. 57)
- (15) 後期ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の影響のもとに、社会研究の哲学を論じたウインチ (P. Winch) は、「言葉の意味を説明することは、それがどのように使用されるかを叙述することであり、その用法を叙述することは、それが入り込む社会的交渉を叙述することなのである。」と述べる。([52] p. 123 訳書 p. 152)
- (16) フーコーによれば、「人間は^{シニユ}記号をつくるためのものを自然から受けとるが、それらの^{シニユ}記号は、まず、他の人々との合意によって、残されるべき^{シニユ}記号、それらに認めるべき価値、それらの用い方の規則を選ぶのに役立ち、ついで、最初のをモデルにして新たな^{シニユ}記号を形成するのに役だつのだ。同意の最初の形態は、^{シニユ}音声記号(それは遠くからでも認知しやすく、夜間に使用できる唯一のものである)を選びとることであり、第二の形態は、まだ標識をもっていない表象を指示するために、それと隣接した表象を示す音に近い音を合成することである。」([11] pp. 132-133)
- (17) 概念の存在を否定するシュモラー (G. Schmöller) は、日常的言語から多義性と曖昧さを取り除くことによって「言葉と名称を概念に転化する」([43] p. 104) と述べる。
- (18) 概念の外延は、その概念にふさわしい値域 (appropriate realm) において求められなくてはならない。経験概念の外延のふさわしい値域は、物質的実在的な事物・事象であり、通常は複数の個体の集合であるが、一つだけの個体概念 (単独概念) もある。
- (19) ドイツの後期歴史学派としてのシュモラーの方法論的立場は、数量的かつ歴史的に膨大な量の事象から適切な規模に圧縮された国民経済を、比較・類別の観点から統一的な概念体系のもとに整理・分類して統一的関連の形で把握することであった。([43] p. 20) このように資料収集に重きをおいたシュモラーにとっての概念は、分類のために用いられ、その分類から本質的なものを析出するための道具であった。シュモラーは概念について次のように述べる。「同一のものあるいは類似のものから、共通の属性あるいは結論が述語となる集団を形成することによって、すべての概念は現象の著しく大きな外的・内的多様性を単純化する。すべての概念構成は、同一のものあるいは類似のもの総括によって、現象を分類しようとする試みである。」([43] p. 103) そして「概念すべてがそもそも模写ではありえない……。」([43] p. 109) 「概念構成はなによりも学問的な合目的性に基づくのであり、概念が絶対的に正しいのかどうかではなく、それが意図された学問的目的にもっとも適合的に形成されているかどうか一般に問題となるのである。」([43] p. 105) ただし、シュモラーは歴史学派らしく「いかなる概念構成も現象の分類を含んでいる。」([43] p. 105) として現象との不離不即を忘れないが。
- (20) 岡谷は、言葉の発生条件として次の4つを挙げている。1 発声学習が可能であること。2 音と意味

とが対応していること。3 文法が存在すること。4 社会関係の中で使用されること。([34] p.15)

- (21) すべての概念がこの出自を有するのではない。形而上概念や論理概念のうちには事物とか事象という経験的地盤とは全く関係のない概念もある。そして発生史的には経験概念は岡谷の4条件のうち前者の1および2の条件の下でたとえ後者の3および4の条件が不備であっても発生するが、形而上概念や論理概念は3と4の条件が整った後でなければ成立しない。
- (22) 「私的言語」とは、ウィトゲンシュタインが自己の前期の思想である「意味の対象説」から転じて後期の思想の「意味の使用説」を採用するさいに吟味された論点である。ウィトゲンシュタインは、「私的言語」の不可能性を主張したが、これは、ラッセルを含めた英国経験論の言語論を否定するものであった。「他人は、誰も理解せず、しかし私は『理解していると思う』声を、人は『私的言語』と呼ぶことが出来よう。」([53] 269 p.187)そして「私 [引用者注:ウィトゲンシュタイン本人]が考えている言語(私的言語)の語は、話者のみが知り得るものを——具体的に言えば、話者の直接的で私的な感覚、感情、気分、等々を——指示すべきものなのである。それゆえ他人は、この言語を理解出来ないのである。」([53] 243 p.175)感覚に名前をつけるということは、「そこに於いては、——痛みに与えられた新しい語が置かれるべき場所を示すところの——『痛み』という語の文法が前提されているのである。」([53] 257 p.182)名前が単なる感覚刺激に対応するレッテルであるならば(自分に対する覚書としても)それは可能である。しかしながらそれが他者との共通言語であろうとするならば、そのレッテルは他者との共通の文脈の中に置かれなくてはならない。刺激レベルを超えて認識レベルでの考察における概念論においては、「私的概念」は存在もしないし、そもそも「私的」は「概念」に対して形容矛盾なのである。なお、ハッキング(I. Hacking)によれば、ホブス(T. Hobbes)は言葉を観念を表わす記号としてとらえている。「私が観念の全盛期と呼ぶ時期においては、言語は本質的に私教的なものと考えられている。ホブスの印象深い表現が言うところの『精神的言説』が、公共的な意志伝達に先行し、その基礎となっているのである。」([12] 訳書日本語版への序文 p.3)そして「言語とは本質的に私秘的なものであり、それが公共的であるのはたまたまなのである。デカルトやヒューム、ロックやライプニッツ、そしてカントでさえもホブスと同じように考えていた。」([13] p.121 訳書 p.248)つまり「カントの哲学はすべて、私秘的なエゴという古典的概念を基礎として築かれている。それゆえ、人間の判断に何らかの客観性を保証するために、彼は共有判断の理論を構築しなければならなかった。」([13] p.135 訳書 p.272)続けて、「それに対してハーマンは、自己が言語や社会的交流という公共の世界で構成されるということを当然と見なしていた。」([13] p.135 訳書 p.272)そこでハッキングは、次のように述べる。「私の意見では、言語はハーマンの時代に公共的なものとなった。しかし現在の分析哲学に見られる言語の公共性への入れ込みようは、おそらくまったく別の起源から生じてきたものだ。ヴィクトリア・マクギアが指摘してくれたのだが、公共性へと至る道はたくさんありうる。そしてそのうちの一つはカントに端を発するものだ。共有判断の理論はカントの客観性の哲学にとって本質的で独特な要素である。」([13] pp.135-136 訳書 p.273)続けて「事物はどのようにして名前を持つようになるのかと考えるとき、われわれはふつう、ともかくもまず事物が先に存在して、それらに神や人間が名前を与えたのだ、というふうに説明をする。しかしハーマンによれば、これは誤解に満ちた神話にすぎず、事物はそもそも名づけに先行して存在しえない。個物としての事物はそれらを記述する言葉があって初めてそこに存在するようになるのだ。さらに大事なのは次の点である。事物を記述するそれらの言葉は、啓蒙主義者が想定する最初の人間アダムが心の中で独り言ちて作り出すような、私秘的なものではないのだ。それらは、人間の最初の共同体で発せられるべき言葉なのである。」([13] p.139 訳書 p.279)私は前稿において([50] p.34 注(7))同様な例を聖書から引いたが、名づけは、神もしくは誰か個人によって命名されるのではなく共同体による行為であると考えている。だからといってハーマンの、言語がなければ質料も形相もな一つ存在しないとする「言語主義(verbalism)」([13] p.138 訳書 p.279)には与しない。一般論として、事物と言葉との後先はそれらの状況に依存しており、一律に確定できない。しかしながら、ここで取り上げている経験概念については、事物が記号(言葉)

に先行する。

(23) 知覚対象が言語化される以前の知覚像についても「無垢な風景なるものは事実存在しないばかりではなく、存在しえないのである。いかなる風景も、それがまったくの空虚でないかぎり、何かの規定をもった風景である(空虚な風景もまた、空虚という明白な規定をもっているというべきだろう。)たとえ、単なる色の広がり風景ですら、それは特定の色が特定の形状にひろがる、という規定をもつ風景である。」([36] p.189)

(24) クーン (T. Kuhn) は、異常事例 (anomaly) を、「自然が通常科学に共通したパラダイムから生ずる予測を破る」ような現象として述べる。([24] pp.52-53 訳書 p.59)そして「変則性 (anomaly) はパラダイムによって与えられた基盤に対してのみ現われてくる。」([24] p.65 訳書 p.73)のである。クーンは理論のパラダイム負荷性を主張し、このような理論負荷的なパラダイムがあるからこそそれに反する事例に気づくというのである。しかしながら一方で、クーンは、「変則性に気付いたことが——つまり、自分のパラダイムからは出てこないような現象に気付いたことが——革新性に気付く道に導く本質的役割をしたのである。」([24] p.57 訳書 p.64)と述べるように理論負荷的でない知覚作用を認めるのである。また理論負荷的な認識を強調するハンソン (N. Hanson) も、同様な知覚作用を次のように述べる。「ケプラーは、火星の軌道が楕円であるという仮説から出発、そこからティコ・ブラーエの観測事実が確認した言明を演繹したわけではなかった。こうした観察事実が出発点として与えられ、そして、それらの事実が、当の問題を設定した。ヨハネス・ケプラーの出発点はまさにそこにあった。

彼は何度もその事実群に戻らねばならなかった。事実群からある仮説を立ててみる。またその事実に戻ってそこから別の仮説を立ててみる。」([14] p.72 訳書 pp.155-156)ブラーエは最後まで太陽説を保持しそれを修正しようとしたのであるが、ブラーエのこの観測事実そのものは理論の負荷性を免がれていたのである。とすれば、異常事例がそのパラダイム内認識ではカバーしえない事象であるならいかにしてわれわれはそれに気づくことになるのであろうか。既存のパラダイムに反することによってこそはじめて知覚されるという事実は、該当の理論に反するということからして全面的に理論負荷的ではない。そこには理論に負荷されていない経験概念が生まれる余地がある。

(25) 「かくして、酸素の発見のような事象を分析するには、新しい用語と概念が必要となることは明らかである。(略)新しい種類の現象を発見するということは、きわめて複雑な事象であって、あるものが存在すること、それが何であるかということ、その両方の認識が含まれるからである。」([24] p.55 訳書 p.62)クーンは、それまでのパラダイムである燃素説に対する異常事例として「酸素」を例として引くが、まだ「酸素」ではない事象の認識はいかにして獲得されたのであろうか。もちろん、この「事象」はいまだ認識とはいえないが、燃素説のパラダイムでは認識しえない「事象」の気づきがあるはずである。これこそがもし取って無垢というならば無垢の経験概念である。しかしながらこのような経験概念は「概念」とよぶにはふさわしくないため、概念に対抗するには概念でなくてはならないから、「燃素」に対して「酸素」という概念が仕立てられることになる。クーンの主張する「革命」はここから第一歩が踏み出されるのである。

(26) しかしながらクワイン (W. Quine) は、そのような異常事例が、即、概念体の変化にはつながらないとする。「しかし、繰り返すならば、これら科学理論も、常識という理論も、経験的証拠によって一意的に真偽が決まらない。これがクワインの執拗な主張でありました。(略)そして、この非決定性は、クワインによれば『より基本的な非決定性に付随する』事象なのであります。つまり『我々の〔感覚器官の〕表面への刺激こそが世界についての手がかりの全てである』にもかかわらず、日常的な事物・科学的に指定された事物という『両種の出来事は、我々の〔感覚器官の〕表面への刺激によっては決して決まらない』、という基本的な非決定性であります。(略)そして、特定の概念枠のもとで、一定の常識的理論が形成されたといいたしましても、それと整合的な『科学の』理論にかんしても、互いに両立しえぬ理論が複数とあり存在することになるわけであります。」([35] pp.213-214)そこでクワインは、経験がもたらす概念体内部の対応を次のように述べる。「地理や歴史についての

ごくありふれた事柄から、原子物理学、さらには純粋数学や論理に属するきわめて深遠な法則にいたるまで、われわれのいわゆる知識や信念の総体は、周縁に沿ってのみ経験と接する人工の構築物である。あるいは、別の比喻を用いれば、科学全体は、その境界条件が経験である力の場のようなものである。周縁部での経験との衝突は、場の内部での再調整を引き起こす。いくつかの言明に対して、真理値が再配分されなければならない。ある言明の再評価は、言明間の論理的相互連関のゆえに、他の言明の再評価を伴う——論理法則は、それ自身、同じ体系のなかのもうひとつの言明、同じ場のなかのもうひとつの要素にすぎない。ひとつの言明が再評価されたならば、他の言明も再評価されなければならない。そうした他の言明は、はじめの言明と論理的に連関している言明であるかもしれないし、論理的連関そのものについての言明かもしれない。だが、場全体は、その境界条件、すなわち経験によっては、きわめて不十分にしか決定されないのので、対立する経験がひとつでも生じたときに、どの言明を再評価すべきかについては広い選択の幅がある。どんな特定の経験も、場の内部の特定の言明と結び付けられているということはない。特定の経験は、場全体の均衡についての考慮を介して、間接的な仕方でのみ、特定の言明と結びつくのである。(段落)もしこうした見解が正しければ、個別の言明の経験的内容について語るのには誤りのもとである——とりわけ、それが、場のなかで経験に近い周縁からはるかに離れている言明であるならば、なおさらである。なおそのうえに、経験に依存して成り立つ総合的言明と、何が起ころうとも成り立つ分析的言明とのあいだの境界を探し求めることは、愚かなこととなる。体系のどこか別のところで思い切った調整を行うならば、どのような言明に関しても、何が起ころうとも真とみなし続けることができる。周縁部にきわめて近い言明でさえ、それにしつこく反するような経験に直面したとしても、幻覚を申し立てるとか、論理法則と呼ばれる種類の言明を改めることによって、相変わらず真であるとみなし続けることができる。逆に、まったく同じ理由から、どのような言明も改訂に対して免疫があるわけではない。排中律という論理法則の改訂さえ、量子力学を単純化する一手段として提案されている。([39] pp. 42-43 訳書 pp. 63-64) このように長い引用になった理由は、クワインが「経験に近い周縁」(経験概念)からそれとは「はるかに離れている言明」(形而上概念)そして論理法則(論理概念)というように本論文に近い立場を想定していると思われるからである。それに加えれば、クワインは概念図式 (conceptual scheme) (概念体) という用語をしばしば用いる。

- (27) これまでの論述では経済学における概念体を想定していたために「実用規準」という用語を使用してきた。パース (C. Peirce) が定式化したプラグマティズムの格率は、概念の明晰性はその概念の対象における効果による、というものであったため、概念がどのような実際効果として現われるかを念頭においていたからであった。しかしながら、経験概念の規準としては「実際効果」は、十分条件ではあるが必要条件ではなかった。そこで、認識論的には、以後は (パースに倣った言い方をすれば) 不格好な用語ではあるが、「実感規準」を使用する。その事由は以下の通りである。パースの提唱したプラグマティズム (pragmatism) という用語については厳密な使用制限がある。概念を明晰にするために、パースはプラグマティズムを次のように定式化した。「ある対象の概念を明晰にとらえようとするならば、その対象が、どんな効果を、しかも行動に関係があるかもしれないと考えられるような効果をおよぼすと考えられるか、ということをよく考察してみよ。そうすれば、こうした効果についての概念は、その対象についての概念と一致する。」([37] vol. V. 5. 402 p. 258 訳書 p. 89) 後にジェームス (W. James) は、合理論と経験論の対立を踏まえて、パースがプラグマティズムとして主張した実際効果を持ち出し、観念を信念に換えるためには真理は必要条件ではあるが十分条件ではなくそれに有用性を加えたのであった。こうして現実生活での行動を決定する信念の形成を説き、経験論の立場と合理論の立場を融合しようとしたのであった。パースが本来目指した科学的論理学の分野でのプラグマティズムという用語をこのように拡大解釈をしたジェームスに対してパースは「プラグマティシズム (Pragmaticism)」([37] vol. V. 5. 414 pp. 276-277 訳書 p. 225) と改名し、再定式化したのである。「どんな記号であれ、その記号のもつ理性的な (intellectual) 意味の総体とは、その記号について考えることのできるあらゆる状況とあらゆる意図のもとでの用法から導きだされる

人間の理性的 (rational) 行動の、あらゆる一般的な (general) 様式の総体にほかならない。」([37] vol. V. 5. 438 p. 295 訳書 p. 247) そのような改名は、「ジェームズのいう、反科学的な主張にもとづく『情緒的な』反応を排除して、もっぱら科学的探究との関連をしめすものであり、また『一般的な』という限定は、ジェームズがおこなったような『特殊な』経験の強調をさけるため」([46] p. 68) であった。カントの影響下にあるパースにとっての関心は、「理性的 (intellectual, rational) な概念であり、経験的な概念ではなかったのである。例えば、パースは、プラグマティズムは、「徹底した現象主義」か、という問いに答えて、「むしろその逆であって、ことばおよび一般概念から感覚的要素を除去し、その理性的な意味をとらえようと努める。しかもプラグマティズムは、ことばおよび命題の理性的な意味を、人間の合目的な行動との連関においてとらえようとするのである。」([37] vol. V. 5. 428 p. 285 訳書 p. 237) このように「プラグマティズム」は、概念を明晰にするために、パースは理性的な概念に、ジェームズは情緒的な概念を含めてすべての概念に適用したのである。私は、プラグマティズムを経験概念だけに適用しているのであり、しかも私は概念の明晰化というよりも概念の性質を問題にしているので「实用規準 (プラグマティズム)」と呼ぶよりも、「実感規準」と呼んだ方がよいかもしれない。ラッセルに従えば、「まず根本的な確実性をもつものは、われわれのその時その時の特殊な思考や感情であるということになる。そしてこのことは、正常な知覚についてと同様、夢や幻覚についてもあてはまる。夢をみたり、幽霊を見たりするとき、われわれは実際に見ていると思う感覚をもっていることはたしかである。たださまざまな理由によって、これらの感覚に対応するなんの物的対象も存在していないといわれるのである。だからして、われわれ自身の経験に関する知識の確実性は絶対的であって、いかにしても例外は認められない。それゆえ、ここに、ともかくわれわれの知識探求の出発点となる堅固な基盤を獲得したわけである。」([40] p. 19 訳書 p. 24) 経験概念の評価規準は、ここにある。

- (28) クワインはプラグマティックな基準の採用について次のように述べる。「概念化されていない実在との客観的な比較を行うことはできない。よって、ある概念図式が実在の鏡として絶対的に正しいかどうかを探るということは、無意味であると私は考える。概念図式の根本的変化を評価するためのわれわれの基準は、実在との対応という実在論的基準ではなく、プラグマティックな基準でなければならない。概念は言語であり、概念と言語の目的は、コミュニケーションと予測における効率性である。これが、言語、科学、哲学の究極的な任務であって、この任務との関係で、概念図式は最終的な評価を受けるのである。」([39] p. 79 訳 p. 117) また、エイヤーは、命題について (概念についてはないが) の有効性を、行動を決定する信念に与える強度として次のように述べる。「我々は今や、『我々が経験的命題の有効性をためす基準は何であるか』という我々のももとの問題に答えるために必要とした知^{インフォメーション}識を獲得したのである。その答えは『我々は、経験的仮説の有効性を〈それがみたくすようもくろまれている機能を実際にみたくしているかどうか〉をみることによりためすのである』というのである。そうして我々がみて来たように、経験的仮説の機能は我々に経験を予知することが出来るようにさせることである。したがって所与の命題が関係しているある観察が我々の期待にあうならば、その命題の真実性は強められる (is confirmed)。この場合その命題が絶対的に有効であると証明されたということは出来ない。何故ならば、未来の観察がその命題の信用を失わせるということは依然として可能だからである。しかしその命題の確からしさが増大させられたということは出来る。(略) 大まかにいって、『観察が命題の確からしさを増す』という場合我々の意味しているすべてのことは、『それがその命題に対する我々の信頼を増す』ということなのであって、この場合この信頼は、『我々が実践において我々の感覚の予報としてそれにどの程度進んで頼ろうとするか』、『都合の悪い経験に面した場合、どの程度他の仮説に対して優先的にそれを守ろうとするか』によってはかられるのである。そうして同様に、『観察が命題の確からしさをへらす』ということは、『未来に対する道案内としてうけいられる仮説の体系の中にその命題を含めようとする我々の熱意を、その観察が減ずる』ということなのである。(勿論、この定義を『確率』という術語の数学的な用法に適用するつもりはない) ([1] pp. 99-101 訳書 pp. 116-117)

- (29) ポパー (K. Popper) は「**実用主義的優先選択**」を主張する。「ヒュームが説明しようと試みた**確実性の感情**——強い信念——は、**実用主義的**信念である。つまりそれは、行為および選択肢のうちからの選択と、あるいは規則性へのわれわれの本能的欲求と期待に、密接に結びついたあるもの、である。(略) **科学の諸結果に対する実用主義的**信念は、非合理的でない。批判的議論以上に『合理的』なものではなく、それが科学の方法だからである。科学の何らかの結果を**確実なもの**として受け入れることは非合理的であろうが、**実際の行動をしようとする場合には『それ以上に良い』ものは何もない。より合理的だといえるようないかなる代替的方法もない。**」([38] pp.26-27 訳書 pp.33-34)
- (30) [47] pp.28-29
- (31) ショーペンハウアー (A. Schopenhauer) は、**身体**の知覚(表象)を悟性の働き(因果律を適用する)が受けとる材料(データ)と考えた。「**身体はわれわれにとって直接の客観**である。主観の認識の出発点をなしている**表象**である。(略)しかし悟性のそもそもの出発点をなすなにか別のものがほかに存在しなければ、悟性が(結果と原因に)適用されるには至らないだろう。この別のものとは、**たんなる感性的な感覚**、**身体が受ける変化の直接の意識**のことであって、この意識があるおかげで、**身体は直接の客観**といえる。(略)身体のような**直接の認識**は、悟性の適用をまだ受けていない**感性的な感覚**なのであって、こうした**直接の認識**を通じて**身体そのものがことばの本来の意味で客観**としてそこにあるわけではなく、そこにあるのはようやく、**身体に影響を及ぼしつつある物体**であるからである。それというのも、ことばの本来の意味での**客観の認識**、すなわち空間における**直観的な表象**は、ただひたすら悟性によってのみ、また悟性によってのみ存在し、悟性の適用以前にはではなく、その適用の後にはじめて成立するものだからである。それゆえ**身体が本来の意味での客観**として、すなわち空間における**直観的な表象**として、他のすべての客観と同じように認識されるのは、**身体の一部の他の部分に対する影響に因果律を適用することによって、ようやく間接的に**であって、それはつまり**眼が身体を見たり、手が身体に触れたり**といった方法によってなのである。であるから、単なる一般感情によっては、われわれには**自分の身体**の形もわからない。ひとえに**認識**によってのみ、**表象**においてのみ、すなわち**脳髄**のなかでのみ、**自分の身体**もはじめて延長した**もの、四肢**をもった**もの、有機体的なもの**であるとわかってくるのである。(略)だからわれわれが**身体を直接の客観**と名づけているにしても、それは以上のような制限つきで理解されなければならない。」([45] pp.135-137) また、ショーペンハウアーは、**身体による客観性** ([49] p.105 (注3)) について次のように述べる。「だからわれわれは**自分の身体**をすらもこの見地からは**表象**と名づけるのである。もっとも**身体**だけは**直接的な客観**とよばれるべきものなのであるが、それにしてもさまざまな**客観**のなかの**ひとつの客観**であることに変わりはなく、やはり**客観の法則** [引用者注: ショーペンハウアーの『**根拠律の四つの根**について』で述べられている**主観による先験的な客観化の形式**] に支配されている。」([45] p.114) そして「**有機的な身体**が他のすべての客観を**直観**するための**出発点**であり、したがって**直観**を媒介するものであるかぎり、わたしはそれをこの著作の第一版においては**直接的客観**と名づけた。しかしながら、この表現はきわめて非本来的な意味でしかあてはまらない。(略)なぜなら、その場合**身体**は**意識**に**たんなる感覚**を提供するだけだからである。**身体**もまた**客観的**に、つまり**客観**として**認識**されるが、それは**間接的に**でしかない。それは、**身体**も他のすべての**客観**と同様、**悟性**ないし**脳**(これらは同じものである)において、**主観的に**あたえられた**結果の認識**された**原因**として、しかもまさにそのことによって**客観的に**呈示されることになるからである。」([44] p.115) 続いてショーペンハウアーによれば、「**物質が直接の客観**(**身体**のこと)に対して〔その**直接の客観**自体がすでに**物質**なのであるが〕、なんらかの働きかけ *Einwirkung* をおこなうことが、**直観**をひき起こすのであり、**物質**が存在するのはひとえにそのような**直観**の中だけである。」[45] p.120)
- (32) パークリのような**経験論者**たちは**抽象観念**(**概念**)を認めない。**観念**は、すべて**個別観念**に結びついているのである。「私は**一般観念**があることを**絶対**に否定するのではなく、ただ**抽象一般観念**があることを否定するのである。」([3] p.245 訳書 p.26) パークリによれば、**一般観念**はすべての**特殊観念**を網羅する**観念**であり、**特殊観念**を想起させるが、**抽象観念**にはそのような**特殊観念**を一つでも想

い起すことができないからである。我々が抽象観念をつくるときは、「ピータァやジェイムスやその他すべての特殊な人間について有する複雑観念ないし複合観念からおのおのに特異なものを取り去り、すべてに共通なものだけを保留して、かくてすべての特殊な人が等しく与かる一つの抽象観念を作る。この観念は、心を或る特殊な存在に限定しようとすればできるすべての事情や相違点を捨象し、切り捨てている。こうして私たちは人間の抽象観念をえると言われる、或いは、人間性ないし人性といったければ、そうしたものの抽象観念をえると言われるのである。なるほど、この観念には色彩が含まれる。なぜなら、色彩をもたない人間はないからである。が、そのとき、色彩は白でも黒でもありえなく、また、いかなる特殊な色彩でもありえない。なぜなら、すべての人間が与かる一つの特殊な色彩はないからである。同様に、身長も含まれる。が、そのとき、身長は高い身長でも低い身長でもなく、さりとて中等程度の慎重でもなく、これらすべてから抽象された或るものである。他の点についても同じである。」([3] p.241 訳書 p.20) さらに、三角形の三角が二直角に等しいという命題について、パークリは次のように論証する。「論証しているあいだ私の視ている観念は、例えば辺の長さが一定限の二等辺直角三角形であるとはいえ、それにもかかわらず、私はたしかにこの論証を、いかなる種類や大きさであれ、すべての他の直線三角形へ及ぼすことができるのである。そしてその理由は、直角も辺の等しさも長さも論証には少しもかわりがないからである。(略) この理由で私は、或る特殊な直角等脚三角形について真であることをいかなる斜角三角形ないし不等辺三角形についても真であると結論するのであり、三角形の抽象観念について命題を論証したからではないのである。」([3] pp.248-249 訳書 pp.30-31) 三角形の内角の和が二直角であるというパークリの論証は不明確さを伴うがしかしながらこのような論証の仕方にパークリの立場が鮮明に表れている。つまり、いま観念を概念のレベルでとらえるならば、パークリは、一般概念は殆ど無数の外延を有しているが、抽象概念の外延は空であると見做しているのである。ヒューム (D. Hume) は、このようなパークリに対して多大な称賛を与える。「抽象観念或は一般観念に就いて非常に重大な一つの疑問が先ごろ提起された。即ち、抽象観念は心がそれを想うとき果たして一般的であるか或はまた特殊的であるかという疑問である。然るにこの点に関して一人の偉大な哲学者が一般に認められていた説を論駁して、すべての一般観念は一定の名辞と結びつけられた特殊観念に他ならず、この名辞が自己と結びついた観念に普通より広汎な表示範囲を与えて、機に応じて相似の個別観念を思い出させるのである、と主張した。私の見るところではこの主張は、学界に於て最近になされた最も偉大にして最も価値ある発見の一つである。」([20] p.325 訳書 [1] p.48) そこでヒュームは、「抽象観念は、他を代表する点に於てどれほど一般的になればとて、それ自身には個別的であるのである。心に現れる心像は飽くまで個別的な事物の心象に過ぎない。ただ、推理に於て恰も普遍的とした時と同じように適用されるだけである。」([20] pp.327-328 訳書 [1] p.52) と述べたうえで、「我々は、如何なる一般名辞を用いる時も常に個物の観念を造ること、これらの個物を悉く挙げるのは殆ど或は全く不可能であること、残りのものは習癖によって即ち必要な都度我々をして之を思い出させる習癖に依って代表されるのみであること、これらは絶対確実である。然らばこれこそ、抽象観念及び一般名辞の本性である。」([20] p.330 訳書 (1) p.55) と主張する。こうした、パークリやヒュームに対してラッセルは彼らの抽象観念の存在を否定する論法は「関係」という普遍概念を見落としているために不当なものであると批判する。「かれら [引用者注：パークリ、ヒューム] の否定論のとったかたちは、『抽象観念』というようなものの存在を否定することであった。かれらは言う、われわれが白さというものを考えようとするときには、ある特殊な白い事物をイメージに描き、この特殊について推論をするのであって、その際われわれは、他の白いものについても同じく真であると見きわめのつかないものをなにかそれに関して演繹することのないように注意しているのである、と。われわれの現実に行なわれる心的過程の説明としては、たしかにこれはおおかた正しい。たとえば幾何学の場合、すべての三角形についてあることを証明しようとするときには、あるひとつの三角形を描いて、これについて推論を進め、他の三角形と共通していない特性は使わないように注意を払う。(略) けれども、ひとつのものが白いか三角形であるということはどうしてわれわれは知なのか、……。(略) ひとつの特殊な三

角形を選んで、あるものがこの選ばれた特殊にちょうどよく似ているならば、それは白い、あるいは三角形である、と言うであろう。しかし、その場合にも、求められている類似はひとつの普遍でなければならぬであろう。白いものは多数あるのだから、類似は特殊な白いものの多くの対の間に成立しなければならない。そしてこれこそ普遍の特性である。(略) パークリーやヒュームは、かれらの『抽象概念』否定論に対するこの反論を理解できなかった。それは、かれらがその論敵と同じく、性質のことはばかり考えて、普遍としての関係をまったく無視していたためであった。」「〔40〕 pp. 95-97 訳書 pp. 112-113) 一方、ラッセルはカントの認識二元論も批判する。「カントの主張したことは、われわれの経験すべてにおいては二つの要素が区別されるということであった。つまり、一つは対象(すなわち、われわれが『物的対象』と名づけたもの)に由来するもので、もう一つはわれわれ自身の本性の由来する要素である。さきに物質および感覚与件のことを論じたとき、われわれは物的対象が連結された感覚与件とはちがうものであり、感覚与件は物的対象とわれわれとの相互作用から生まれたものと見なさるべきであるということを知った。その限りでは、われわれはカントに同意する。ところが、カントに特徴的なのは、われわれ自身と物的対象のそれぞれの持分を割りふりするそのやり方である。かれは、感覚に与えられるなまの材料——色、硬さ、等々——は対象に由来するもので、われわれの方から与えるものは空間・時間における配列、および感覚与件間のあらゆる関係——これは比較、あるいはひとつの感覚与件を他の感覚与件の原因と見なすこと、その他から生じてくる——である、と考えている。このような見解をとった主たる理由は、われわれが空間および時間、因果、比較などに関してはアприオリな知識をもっていると思われるのに、感覚の現実的な、なまの材料についてはそうでないということにあった。」「〔40〕 pp. 85-86 訳書 pp. 100-101) しかしながら、「われわれの本性は、他のものと同様、現存する世界の一事実であって、それが恒常的なものであるということは確実ではありえない。カントの言うとおりでであるとしても、明日は2たす2が5となるようにわれわれの本性が変わるかもしれない。この可能性にはカントは思い及ばなかったようであるが、このことは、かれが算術の命題のためにしきりに立証しようとする確実性と普遍性とをまったく破壊してしまうものである。」「〔40〕 p. 87 訳書 p. 102) そして「事実は、いっさいのわれわれのアプリオリな知識は、本来からいえば、心的世界にも物的世界にも存在しないものに関係するように思われる。そういうものとは、名詞によって名指されうるもの、つまり性質とか関係とかいうものである。」〔40〕 pp. 89-90 訳書 p. 105) しかしながら本論文はこのようなラッセルの批判を認めたくてカントの主観主義の立場に立つ。それというのも、認識の研究は、人間の認識が主たる研究対象であるからである。例えば、数学は規則に基づく論理体系であるから、60(分)+60(分)=2(時間)であるし、 $1+1=10$ (二進法)でもある。ある規則のもとでは、 $2+2=5$ も可能である。また「白さ」や「関係」という事象にしても、人間以外の動物ではまったく異なる受取り方をするであろう。あるいはそのような事象が存在するかどうかにも気にかけることなく生命活動をおこなっているかもしれない。ラッセルは心的世界および物的世界以外にア・プリオリの世界を想定しており、「したがって、関係というものは、心的でも物的でもない世界に置かれるのでなければならない。」「〔40〕 p. 90 訳書 p. 106) と述べる。そして「すべてのアプリオリな知識はもっぱら普遍的諸関係を扱うものである……。」〔40〕 p. 103 訳書 p. 121) しかしながら概念は、人が生得的に有している抽象化能力と経験との相乗作用(カント流の物言いをすれば、「経験のない抽象力は経験概念を生まず、抽象力のない経験は経験概念を育てず。」)によって作りだされるというのが本論文の基本的な立場である。なお、ラッセルは、普遍を知る人間の能力を認めて「われわれの知識について反省してみればわかることだが、普遍の間のそうした関係を時に知覚(perceiving)する能力、それゆえにまた算術や論理学の命題のようなアプリオリな一般命題を時として知る(knowing)能力をわれわれがもっていることは、事実として認められなければならない。」「〔40〕 p. 105 訳書 p. 123) と述べるが、人間は抽象化能力を使用してそれらを創りだすのである。そしてそれは普遍の世界というよりも論理の世界(論題概念)を形成するのである。

(33) ディーコン(T. Deacon)は、神経生物学および進化人類学の分野から、言語はあたかも脳を宿主

とする寄生虫のように、もっと適切なアナロジーとしては生命と非生命の境界線にあるウィルスのようなものであり、それは脳と共に進化すると主張する。([7] p.112 訳書 p.120)そして言語は、ヒトの「発達のさらに早い段階で獲得可能なように絶えず淘汰圧が働いて、世界のすべての生き残り言語は、可能なもっとも早い年齢で学習できるように進化した。」([7] p.137 訳書 p.153)と考えている。また一方、脳側においては、「記号計算能力を求められたことがヒトの脳の特異な再構造化にとっての大きな淘汰圧となり、間接的ながら現在われわれの『言語本能』を構成している能力と素質の全体の持続的な進化を開始し、推進した淘汰圧であった。」([7] p.340 訳書 p.396)と述べ、言語と脳の進化論的な共進化を主張する。淘汰圧を鍵としてすべてをこじ開ける進化論的推理には結果論的整合性の臭いはするが、現実には理性的である、とするならば首肯できる。しかしながら本論文は、発生的認識論を取り扱うものではないから、これ以上に立ち入らない。認識論の立場からすれば、関心は、認識能力や言語使用能力がどのような生い立ちであろうと既にヒトは両能力を有していることを前提にしている。しかしながら、金子隆芳(訳者)はディーコンについて次のように指摘する。「ディーコン流に言えば生物コミュニケーションは用法論から始まる。具体的にどうとはここで言えないが、ともかく生物が始めから論理的存在であるはずがない。論理(統語)は後からついてきた。」([7] 訳書 p.559)もし金子の指摘するように、ディーコンの共進説には、言葉を使用することが最初で統語や意味は後からついてきたことが含まれるならば、経験概念は概念の生い立ちについて重要な考察となる。というのも、すべての概念は記号(言葉)によって体现され、言葉の獲得はその使用から始まるからであり、そのことは経験概念がすべての概念に先行することになるからである。

- (34) この現象地平という用語には、フッサール(E. Husserl)の生活世界(Lebenswelt)をも想定している。フッサールによれば、生活世界とは、「一切の個別的経験の普遍的基盤として、経験の世界として、一切の論理行為以前に直接にまえもってあたえられるような世界……。」([19] p.33)であり、「すでにガリレオのもとで、数学的な基底を与えられた理念性の世界が、われわれの日常的な生活世界に、すなわちそれだけがただ一つ現実的な世界であり、現実の知覚によって与えられ、そのつど経験され、また経験される世界であるところの生活世界に、すりかえられている……。」([18] p.69)のである。つまり、生活世界は「ある種の『観念化』のたすけをかりて解釈され……。 (略)『この観念のおおいのおかげで、われわれはひとつの方法にほかならないものを真の存在とみなし』、われわれの経験世界をすでにつねにそれにかぶせられた観念のおおいにてらして理解し、それが『ありのままの』世界とおもいこんでいるのだ。」([19] pp.35-36)より詳細に言えば、『数学と数学的自然科学』という理念の衣(略)は、科学者と教養人にとっては、『客観的に現実的で真の』自然として、生活世界の代理をし、それをおおい隠すようなすべてのものを包含することになる。この理念の衣は、一つの方法にすぎないものを真の存在だとわれわれに思い込ませる。」([18] p.73)のである。フッサールがこの生活世界への帰還を提唱するのは、意味連関や価値を含むわれわれの日常生活が忘却されてきたからである。本論文の主要な論点のひとつは、概念体には必ず形而上概念が含まれておりしかもそれが概念体の核を形成しているということであった。形而上概念の芽生えが経験概念にあり、そこでこのような生活世界から出生した経験概念のあるものは価値や意義(意味)を有する形而上概念へと育っていくのである。さらに、本論文が経済哲学の基盤の形成を目指していることやまた本論文のタイトルに付した注の含意を補強するということからフッサールの次の言葉を掲げておこう。「前世紀の終わりごろから現われた、学問に対する一般的な評価の転換(略)というのは、学問の学問性に対するものではなく、むしろ学問一般が、人間の存在にとって何を意味してきたか、また何を意味することができるのか、という点に関するものである。19世紀の後半には、近代人の全世界観は、もっぱら実証科学によって徹底的に規定され、また実証科学に負う『繁栄』によって徹底的に眩惑されていたが、その徹底性とは、真の人間性にとって決定的な意味をもつ問題から無関心に眼をそらす、ということの意味していた。単なる事実学は、単なる事実人をしかつぐらならない。(略)この事実学はわれわれの生存の危機にさいして、われわれに何も語ってくれないということ、われわれはよく耳にする。この学問は、この不幸な時代にあって、運命的な転回にゆだねられている人間

にとつての^{しょうび}焦眉の問題を原理的に排除している。この問題というのは、この人間の生存全体に意味があるのか、それともないのかという問いである。この問いこそは、それがすべての人間に対してもつ普遍性と必然性とかからみて、一般的に省察されるべきものであり、理性的な洞察からの答えを要求するものではなからうか。」「〔18〕 pp. 16-17) また、フッサールはヨーロッパ諸学の危機として「第2節 学問の理念を単なる事実学に還元する実証主義的傾向。学問の『危機』は、学問が生に対する意義を喪失したところにある」〔18〕 p. 16) を節の題と掲げている。ただ、フッサールの「生」の対する態度とディルタイのそれとは異なっている。端的に言えば、フッサールは理性による生の意味を、ディルタイは意志による生の意味を生活世界という地平で問うている、というのが私の解釈である。

- (35) ラッセルは次のように述べる。「なにかが存在するという知識はすべて、その一部は経験に依拠しなければならないのである。あるものが直接的に知られるときは、その存在は経験だけによって知られる。あるものが、直接には知られず、その存在を証明されるときには、その証明には経験とアプリアオリな原理との両方が要求されねばならない。知識は、その全部ないし一部が経験にもとづくものであるときには、経験的と呼ばれる。かくして、存在を主張する知識はみな経験的であることになる。存在に関するたんにアプリアオリな知識は仮説的であって、これは、存在するもの、あるいは存在するかもしれないもの間の関係を示しはするが、現実の存在 (acutual existence) を与えるものなのではないのである。」「〔40〕 p. 75 訳書 p. 89) しかしながらこのラッセルの記述には「存在」の意味について不明瞭さが残る。そこで「現実の存在」ということを明らかにするために私は現象地平という用語を採用した。
- (36) 「真理」という用語の使用については細心の注意が必要であるけれども、ヒュームによって独断論の微睡から目ざめたカント〔23〕 pp. 19-20) は、真理を最終的に経験に求めた。「高い塔と、高塔にも比すべき偉大な形而上学者とは一般に風当りの強いものであるが、しかしこれは私には当てはまらない。私の立場は、経験という豊沃な平地である。」「〔23〕 p. 259 注) と述べたうえで、「私の観念論を隈なく支配しているところの原則はこうである。『およそ物 [自体] に関する認識は、単なる純粹悟性と純粹理性によるとを問わず、まったくの仮象にほかならない。真理は経験のうちにのみ存する。』」〔23〕 p. 260) と、認識の最後の拠り所は経験にあるとしたのである。物自体は不可知としたカントの立場からすれば、表現は概念を用いてなされる以上真理は経験概念によって表現され、その経験概念は知覚作用から産出されたものであるということになる。「真理」という用語は多義的で不明瞭であるからカントのこのような所論が正しいかどうかはここでは詮索しないが、観念論者として自負しているカントも経験の地平が認識の眼前に広がっていることを認知していたのである。
- (37) ウィンチ (P. Winch) の著書『社会科学の理念 — ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究 (The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy)』の目的の一つは、社会科学における概念分析 (ウィンチにとってこれが哲学) の重要性を説くことであつた。「たとえば私は、社会諸科学においてこれまで提起されてきた多くのより重要な理論的問題は、科学ではなくむしろ哲学に属し、したがって、経験的調査によってではなく、むしろア・プリアオリな概念的 analysis によって解決されるべきものだということを示すつもりである。たとえば、何が社会的行動を構成しているのかを問うことは、社会的行動という概念の解明を要求することである。この種の問題を取り扱う場合には、我々は経験的調査の結果を『待ち受けている』必要はない。それは、我々が使用している概念の意味をつきとめるといふ問題なのである。」「〔52〕 pp. 16-17 訳書 p. 22)
- (38) ここでは「世界」を想定として述べているが、同様な作用は、概念間の関係としても述べられるであろう。「世界」はその概念体の思考内容を表現しており、実際に概念結合としての概念体を解体する場合には、ここで述べられる相互作用は、概念間の相互作用として解体される。
- (39) 形而上学的要素が極力排除されていると考えられている物理学の分野においても、形而上概念が大きな役割をはたすことは次のような引用からも窺い知れる。「太陽の引力のもとに、楕円軌道を描く惑星の運動を投影した場合に、それが測地線になるような四次元空間があるとすれば、それは地球の表面のような曲がった — つまり平らでない — 四次元空間でなければならぬ。ミンコスキー

空間は平らであるから、それとはちがった四次元の曲がった空間を考えることによって、万有引力の本性が理解されるのではないか。これがアインシュタインの奇想天外ともいべき発想であった。古代ギリシアの自然哲学の時代ならいざしらず、二十世紀という精密科学の進歩した時代に、こういう形而上学観念が彼の念頭に浮かんだこと自体驚くべきであるが、さらにもっと驚くべきは、それが一般相対論というに美事な理論体系として結晶し、しかも、その理論はニュートンの理論以上に精密に観測事実と合致したことである。」([54] p.34) 一方、ヴェーバー (M. Weber) が文化科学の成立に関して述べた次のような性質も意義の世界でおこなわれる。「文化科学としての社会科学の歴史も、概念構成によって実在を思想的に秩序づけようとする試みと、そうして獲得された思想像の、地平の拡大あるいは推移にもとづく解体との、たえざる交替である。

とはいえ、そうなるのは、およそ概念構成そのものに欠陥がつきまとうからではない。文化科学においては概念構成が問題設定に依存するが、この問題設定が、文化そのものの内容とともに変遷を遂げるからである。」([51] pp.300-301)

- (40) 最近の経済学論争から例を引こう。マネタリストのフリードマン (M. Friedman) は、ケインジアンを用いる乗数分析に有効性を見いださない立場である。「言葉をかえていえば、それは、現在消費のうちずっと大きな部分が自律的と考えられ、現在所得に依存したがって乗数過程を通じて投資に依存するのはずっと小さな部分であると考えられる、ことを意味している。その結果、投資乗数は小さくなり、体系は循環的により安定的な性質のものとなる。われわれがデータから推定した特定の消費関数については、独立支出についての個人可処分所得の乗数は約 1.4 にすぎず、これは累進的な個人税制、法人貯蓄等々の安定化要素を考慮していない数値である。誤解を避けるために取急ぎ繰返すならば、以上は、われわれの経済の実際の経験的特徴についての主張をしようとするものではない。それは条件付きの主張であり、それが正しいかどうかは、経済変動の説明として所得・支出理論をあらかじめ承認するかどうかに依存しているのである。」([10] p.238] 訳書 pp.443-444) このような相違点の源泉は、フリードマンが属するマネタリストの所得・支出理論では、古典派・新古典派の中核的な形而上概念として「セイの法則 (Say's law)」を据えており、一方、それに対峙するケインジアンの中核的な形而上概念は「有効需要の原理」という相違にある。
- (41) カントによれば、「してみると経験概念は、確かに感官の一切の対象の総括としての自然において自分の地域をもちはずすが、しかし領域を占有するのではなくて、単に自分の住所 (domicilium) をもつにすぎない。なるほど経験概念は、法則に従って産出されはするが、しかし立法的ではないからである、それだからかかる経験概念に基づくところの規則は経験的なものであり、従ってまた偶然的なものにすぎない。」([22] [上] pp.26-27)
- (42) オーストリー学派の開祖のひとりであるミーゼス (L. Mises) は、人間行為学をア・プリオリな構築物と考えた。「カントによる分析にならって、哲学者たちは次のような疑問を抱いた。人間精神は、ア・プリオリな思考によって外界の実在をいかにして取り扱うことができるのであろうかと。人間行為学に関する限り、その解答は明白である。ア・プリオリな思考と推理は人間行為とともに、人間精神の発露の二側面である。人間精神の論理的構造が行為という実在を創造する。」([28] p.42 訳書 p.52) そのために経験的な行動 (「行為」) ではない) すべてが、分析の対象になるわけではないのである。「人間行為学者が経験に言及する場合は、実在し行為する人間に興味ある問題と、アカデミックな興味をそそるだけの問題とを区別する必要があるときのみである。人間行為学の特定定理を行為の特定問題に適用し得るか否かという問題の解答は、この定理を特徴づける特定の仮定が、実在の認識に価値を持つか否かを検証できるか否かにかかっている。これらの仮定が、人間行為学者の研究しようとする実態に合致しているか否かの答に、それが依存していないことは確かである。人間行為学の主要な——ある人々をして言わしむれば唯一の——精神的用具である仮構 (imaginary construction) は、行為という実在には決して存在し得ない状態を記述する。しかし仮構は、この実在に起こりつつあることを理解するために不可欠である。」([28] p.41 訳書 pp.51-52) ミーゼスの意味する行為は「人間精神の構造」(つまり理性を意味し、したがって論理性も併せて備えている) からア・プリオリに

指令されるのであり、その「人間精神の構造」とは、オーストリー学派の意義の世界に属する、個人の自由を含む自然の秩序（形而上概念）である。

- (43) クーンは、実験における資料の選択について次のように述べる。「科学者が実験室で行なう操作や測定は、経験から『与えられた』ものではなくて、『苦勞して集めた』ものである。それらは科学者が見るものではない。少なくとも科学が十分進歩し、注意が集中するまでは見えないものである。むしろ、それらはより基本的な知覚の内容に対する具体的な指標であり、だから、それらは、採用されたパラダイムの有効な整備の機会を約束する故にのみ、通常研究の注意深い吟味のために選ばれるものである。操作や測定は、それらを取り出すもとにある程度になっている直接経験よりも、はるかにもっと明確にパラダイムによって規定されている。科学は、あらゆる可能な実験室の操作を扱うものではない。むしろ科学は、パラダイムと、そのパラダイムである程度規定されている直接経験と照合させるために、関係するようなものだけを選ぶ。」〔24〕 p. 126 訳書 pp. 142-143 私は、クーンが指摘したパラダイムは形而上概念に相当し、したがって意義の世界に属すると考えている。
- (44) 経済学におけるこのような混沌とした世界を意味づける例をハイルブローナー (R. Heilbroner) とミルバーグ (W. Milberg) は、次のように描写した。「それとは逆に、われわれの目的は、そもそも発見の方法とはいかなるものなのか、すなわち生の現実の『混沌』——ウィリアム・ジェイムズの有名な言葉でいえば、カテゴリー化されていない自然の『蜂はぶんぶん舞い花が咲き乱れる雑然とした状態』——を解釈することの意味を、注意深く検討するための準備なのである。(略) 社会的であると同時に自然的でもある『世界』は、そのような投影によって、姿態と同時に意味をも受け取るが、現実を社会的に構成するのはなんら不当なことではなく、世界を心理的のみならず倫理的にも住むに適したものにするために必要かつ正当なことでさえある。」〔17〕 pp. 75-76 訳書 pp. 106-107
- (45) ヴェーバーは、学問上、価値判断をいかにして客観的に取り扱うかを追求した。「ところで、価値判断にかんする科学的な取扱いは、さらに進んで、意欲された目的とその根底にある理想を、ただたんに理解させ、追体験させるだけでなく、とりわけ、それらを批判的に『評価する』ことをも、教えるものでありたい。もとより、この批判は、たんに弁証論的な性格をもちうるにすぎない。つまり、この批判にできることといえば、歴史的に与えられた価値判断や理念のなかにある素材を、形式論理的に評価すること、すなわち、意欲されたものが内面的に矛盾を含んでいてはならないという要請に照らして理想を吟味すること、にかぎられる。価値判断にかんする科学的取扱いは、こうした目的を立てることにより、意欲する者を助けて、かれの意欲内容の根底にある究極の公理、すなわち、かれが無意識のうちにも出発点とし、あるいは——矛盾に陥らず、首尾一貫性を保つためには——出発点とせざるをえなかったはずの究極の価値規準を、みずから反省させることができる。」〔51〕 pp. 34-35) そして次のように述べた。『『各人は、自分の心のなかに抱いているものを見る』という芸術家的な叙述の意義の特性が、付きまどっている、——妥当な判断はつねに、直観的に把握されたものの論理的加工、すなわち、概念の使用を前提としている。』〔51〕 p. 151) ここで述べられている意義とは、「われわれの学科のあの厄介息子——すなわち『価値』という用語」〔51〕 p. 151) に纏わるものであり、ヴェーバーはそれを客観的（ここでの客観的とは論理的に無矛盾ということ）な概念にしつらえ Idealtypus として提示したのである。私はこの Idealtypusこそ論理の世界から意義への働きかけの代表例とみている。
- (46) 浜田は、『働くものから見るものへ』（「働くもの」とは自分が主体的に経済社会に働きかけるパターンを意味し、「見るもの」とは経済社会を観照的にながめるパターンを意味する）というタイトルでこの半世紀のマクロ経済学の移り変わりを述べた文中で、相互作用の一こまが描写されているのでそれを引用する。「現実の経済と、現在の正統派の経済学にギャップがあるとき、経済学者の選択は難しい。正統派の経済学がここにあるのだから、現実と合わなくても正統派のパラダイムの精緻化に力をつくすというのも一つの選択であろう。しかしそれは、暗い所で鍵をなくした人が灯の下を探すたぐいである。理論を現実的にするために、ケインズ経済学の用語を古い工具箱から持ち出しても、色々とその道具の欠陥がすでにわかっているので意気が上がらない。」〔15〕 p. 45) 「パラダイムの精緻

化」は、論理の世界から意義の世界への支配的作用であり、「古い工具箱」は、以下で扱う経験の世界から論理の世界への禁止的作用である。

- (47) 経済学の方野からその例を引けば消費関数についてのフリードマンの恒常所得仮説にその有様がみられる。「『恒常所得』および『恒常消費』と名づけられる量は、理論的分析においてはこのように非常に決定的な役割を演ずるのであるが、個々の消費単位について直接に観測することのできないのである。(略) 理論的概念は事前的な量であり、これに対して経験的データは事後的なものである。しかも、経験的データを解釈するのに理論的分析を用いるためには、理論的概念と観測された量との間に対応がつけられなければならない。(略) …原資料からその明らかな欠陥を修正して恒常所得および恒常消費の推定値をつくり、この修正された事後的な量が、求める事前的な量でもあるかのように考えることである。」([10] p.20 訳書 p.35)
- (48) 丸山真男によれば、「私たちの認識は無からの認識ではありません。対象を整理するひきだしというか、箱というか、そういったものが予め私達の側に用意されていて、それを使いながら認識をします。概念や定義はそういうひきだしの一種です。」([26] p.455) その「ひきだし」には論理概念が収納されており、その奥には「経験の合理的整除を要請するイデオロギー」([26] p.17) としての形而上概念が収納されているのである。
- (49) 論理概念は経験を発見するための道具でもある。フリードマンによれば、『マーシャルにとって、経済理論は“具体的真理を発見するための機関”であった。』([9] p.56 訳書 p.56)
- (50) 論理の世界が創出する分析用具(論理概念)の典型的なものは、論理学と数学であるが、それについて神経学者のマッカラー(W. McCulloch)は次のように述べる。「物理学者が発見するのは、この世の規則正しい事柄に限られている。そのような規則性が存在するということが、科学の第一法則である。ものごとの間の関係に規則性を発見し、理論物理学を創り上げるには、論理学と数学の訓練が必要である。論理学や数学は、本質的には同義反復^{トートロジー}の領域であるが、われわれは、ここでは驚くべき規則正しさと、複雑きわまる変換を作りだす。」([27] p.480) 特にここにこれを引用したのは、論理学・数学がトートロジーであるとの見解は本論文の立場と同一であるからである。
- (51) 論理作業によって経験を論理的に秩序づけようとする過程を物理学者のアインシュタイン(A. Einstein)は次のように述懐する。「科学が問題にするのは、一次概念の全体、すなわち感官体験に直接結びついている諸概念であり、それと同時にそれらを結びつけている諸命題であります。(略) しかしながら、このようなことは、真に科学的な志向もった精神を満足させることができません。なぜならば、このようなやり方で獲得された概念や関係の全体は、論理的統一性という点でまったく不十分なものだからです。この欠点を補うために、人は一次概念や相互関係が比較的とぼしい一つの体系を考案します。ただし、この体系は論理的に導きだすことのできる概念および相互関係として、『第一層の』一次概念および相互関係を保有します。この新しい『第二の体系』では、そのより高度な論理的統一性の代償として、いちばん最初に設定されている概念〔すなわち第二層の概念〕は、もはや感官体験とは直接に(かつ直観的に)結びついてはいない概念だけである、ということになります。論理的統一性をさらに追求していくと、第二層〔したがって間接的には第一層〕の諸概念や諸関係を導きだすための、それ自身の概念や関係としてはより少なくなった第三の体系にわれわれは到達することになります。(略) 抽象化の理論とか帰納法の信者ならば、われわれの各層のことを『抽象度』とよぶかもしれません。しかし私は、概念の感官体験からの論理的独立性をかくしてしまうことが正しいことだとは思いません。両者の関係に類似しているのはビーフにたいするスープの関係ではなくて、むしろオーバーコートにたいする衣装戸棚の番号の関係なのです。」([8] pp.213-214) 一方、経済学者のフリードマンも、論理的作業を「オーバーコートに対する衣装戸棚の番号」として次のように述べる。「その機能〔引用者注:理論の機能〕は、経験的資料を組織したり、またそれについてわれわれの理解を容易にするための^{フレイミング・システム}整理体系として役立つことであり、それを判断する規準は、整理体系にとって適切なものかどうかということである。範疇は明確かつ正確に定義されているか。それら範疇はすべてをつくしているか。各個別項目をどこに整理すべきかが知られているか、そ

れともかなりのあいまいさが残るか。われわれが欲する項目がすぐに発見できるように見出しとか小見出しの体系ができていないか、それともあちこち捜さねばならないか。いっしょに考察したい項目が、同じところに整理されているか。整理体系は、相互参照に骨を折らないでもすむようになっていないか。」([9] p.7 訳書 p.7) という道具としての役割を担っているのである。

- (52) 形而上概念を最終的に打倒しようものは、当の形而上概念においては他にない。つまり、形而上概念の覇権をめぐる闘争は意義の世界でのみおこなわれるのであるが、しかし既存の形而上概念のヘゲモニーは、その現実性という色彩が褪せることによって内的な力を弱めていく。そしてそのような腐食作用は経験概念によって遂行されるのである。ハイルブローナーとミルバークは、次のように述べる。「われわれはビジョンの変化の原因を何に求めることができるのだろうか。スミスの世界からリカードの世界への、あるいはミルの世界からマーシャルの世界への転換をどのように説明すればよいのだろうか。この疑問に対する適切と思われる答えはただ一つしかない。経済世界についての『見方』と経済世界の実際の運動との間には必ず不調和が生じるものである。スミス後の時代に丘陵にまで耕作が進んだ穀物畑、ミルの時代の改革運動、19世紀末までに労働者の生活水準が徐々に改善されたように見えたこと、こうしたことは全て、それぞれの世代の分析以前の認識の変化に大きな影響を及ぼしたに違いないし、経済の再解釈の動機づけに大きな影響を及ぼしたに違いない。(略) われわれはなんらかの説明図式を確立する必要があるし、認識される『物質的/政治的』な生活経験の形状変化は、われわれにとって唯一説明力のある候補のように思われる。大恐慌とケインズ経済学の興隆との間のそうした関係を誰が否定するだろうか。」([17] p.21 訳書 p.30) 私は以前にも図式化した([49] pp.22-23 注(27))ように、生産力水準が経済的文化を形成し、それが経済的世界観の出現の契機となると考えている。ハイルブローナーとミルバークが述べた『『物質的/政治的』な生活経験の形状変化』とは、生産力水準の変化であり、それがもたらす経済文化の変化である。そしてそれらは経験概念として認識されるのである。そうしてその経験概念によって形而上概念の現実性が検証される。ここで再述することになるが、既存の形而上概念が完全に崩壊するのは、「新しい」形而上概念であって経験概念ではない。ただ、この「新しい」形而上概念は経験概念を種として芽生えたものであるが。
- (53) 「価値観」を文化科学として扱おうとしたヴェーバーは、価値観の契機を次のように述べる。「大多数のばあい、もくろまれた目的の追求はことごとく、この意味でなにかを犠牲にする、あるいは少なくとも犠牲にしようから、責任をもって行為する人間の自己省察で、目的と結果との相互秤量を避けて通れるようなものはない。(略) ところで、この秤量自体に決着をつけること [目的を採って犠牲を甘受するか、それとも、目的を断念して犠牲を避けるか、どちらかを選択すること] は、もとより、もはや科学のよくなしうる任務ではなく、意欲する人間の課題である。そこでは、意欲する人間が、自分の良心と自分の個人的な世界観とにしたがって、問題となっている諸価値を評価し、選択するのである。」([51] pp.32-33)
- (54) 西田幾太郎は、直接経験を、即、意義の世界としてとらえる。「直接経験の世界は理解の世界、意義の世界である、感受の世界、事実の世界ではない。純粹経験の統一というのはかくのごとき内面的自動の統一、すなわち意義的統一である。」([32] pp.246-247) 本論文は、このような直接経験を経験の世界と意義の世界とに腑分けする認識論的解体作業である。
- (55) 「クワインによれば、理論とは『過去の経験にてらして未来を予測するための道具』に他ならないのですから、理論を手直しするさいにも、《コミュニケーションと予測の有効性》というプラグマティックな基準が作用することになります。(段落) もちろん、その場合でも通常は、できるかぎり《訂正のコスト》の小さい『周辺』部分の手直しですませるといふ《方法論的保守主義》の戦略が働く、とクワインは申します。つまり、理論を手直しするさいには、i 理論システム内において《訂正のコスト》の大きい文、つまり、より抽象的・よりパラダイムのな文、ii 万人が同意するような観察文、つまりコミュニケーションにおいて《訂正のコスト》の大きい文には、代替の説明が可能でないかぎり、なるべく手を付けない、という基準が要請されてくることになります。しかし、そうした姑息な手直

しては、もはや求める《有効性》が達成されないとすれば、論理法則のように訂正のコストが莫大な文も手直しされるし・すべきだ、とクワインは主張しておりました。従って、クワインふうのホーリズムは、プラグマティズムから由来する『手直し』の規範的な基準を具備しているのであって、文字通り『何でもい anything goes』という、全くのアナーキズムではありません。』([35] pp. 231-232) クワインの「訂正のコスト」という用語を用いるならば、概念体の構造の内部(経験の世界→論理の世界→意義の世界)に向かうほど「訂正のコスト」は大きくなる。

- (56) 論理概念は論理的な時間・空間は有するけれども現象的な時間・空間については無時間および無空間である。それに対して経験概念は必ず歴史的な時間すなわち特定の時間と歴史的な空間すなわち特定の空間を身につけている。そのため論理概念の論理的な因果系列は現象継起的な経験概念によってチェックされる。例えば、特定の論理的枠内ではマネー・サプライの膨張は必然的に一般物価水準の上昇をもたらす、という論理的図式が得られたとしても、現象的には、原因とみなされているマネー・サプライの膨張期が、結果とみなされている一般物価水準の上昇期よりも歴史的な時間として遅れているならば、このような論理的図式はこの特定化されている一般物価水準の上昇を分析する用具として失格なのである。そこで論理の世界では、この論理的図式を救済するためにその論理的枠内に新たな条件を加えるかまたはこの論理的図式を放棄して新たな論理図式の構築に向かわなければならない。

引用文献

- [1] Ayer, Alfred., *Language, Truth and Logic*, 2nd ed., Victor Gollanz Ltd., London, 1946. 『言語・真理・論理』吉田夏彦訳 岩波書店, 1955年
- [2] Ayer, Alfred., *RUSSELL*, Fontana/Collins, New York, 1972. 『ラッセル』吉田夏彦訳 岩波書店, 1980年
- [3] Berkeley, George., *A Treatise concerning the Principle of Human Knowledge* (The Works of George Berkeley. Vol. 1, ed., A. C. Fraser), Clarendon Press, Oxford, 1901. 『人知原理論』大槻晴彦訳 岩波書店, 1958
- [4] ボルノー (Bollnow, Friedrich.,) 麻生 建訳『ディルタイ — その哲学への案内』未来社, 1977年
- [5] Carnap, Rudolf., "Logical Foundations of the Unity of Science, pp. 42-62" (Neurath, Dewey, Russell, Carnap, Morris, "Encyclopedia and Unified Science, pp.1-75" eds., O. Neurath, R. Carnap, C. Morris, *Foundations of the Unity of Science, Toward an International Encyclopedia* Vol. 1 Nos, 1-10, Chicago UP., Chicago, 1955) 「科学の統一の論理的基礎づけ」内田種臣訳 (永井・内田編『カルナップ哲学論集』紀伊國屋書店, 2003年, pp.36-55)
- [6] Carnap, Rudolf., "The Methodological Character of Theoretical Concept, pp.38-75" (eds., H. Feigl and M. Scriven, *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, Vol.1, Minnesota UP., Minnesota, 1956. 「理論的概念の方法論的性格」竹尾治一郎訳 (永井・内田編『カルナップ哲学論集』紀伊國屋書店, 2003年, pp.192-236)
- [7] Deacon, Terrence., *The Symbolic Species—The co-evolution of language and the brain*, W. W. Norton & Company, Ltd., New York, 1997. 『ヒトはいかにして人となったか』金子隆芳訳 新曜社, 1994年
- [8] アインシュタイン (Einstein, Albert.,) 静間良次訳「物理学と实在」(世界の名著 66『現代の科学Ⅲ』中央公論社, 昭和54年, pp.207-252)
- [9] Friedman, Milton., *Essays in Positive Economics*, Chicago UP., Chicago, 1953. 『実証的経済学の方法と展開』佐藤隆三・長谷川啓之訳 富士書房, 昭和52年
- [10] Friedman, Milton., *A Theory of The Consumption Function*, Princeton UP., Princeton, 1957. 『消費の経済理論』宮川公男・今井賢一共訳 巖松堂, 昭和36年
- [11] フーコー (Foucault, Michel.,) 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物 — 人文科学の考古学 —』新

- 潮社, 1974年
- [12] Hacking, Ian., *Why Does Language Matter to Philosophy?* Cambridge UP., Cambridge, 1975. 『言語はなぜ哲学の問題になるのか』伊藤邦武訳 勁草書房, 1989年
- [13] Hacking, Ian., *Historical Ontology*, Harvard UP., Massachusetts, 2002. 『知の歴史学』山口康夫・大西拓郎・渡辺一弘訳 岩波書店, 2012年
- [14] Hanson, Norwood., *Patterns of Discovery—An Inquiry into the Conceptual Foundations of Science*, Cambridge UP., Cambridge, 1965. 『科学的発見のパターン』村上陽一郎訳 講談社, 昭和61年
- [15] 浜田宏一「日本経済 遠にらみ⑥」(『書齋の窓』有斐閣, 1999年7・8月 No. 486, pp. 42-45)
- [16] ヘーゲル (Hegel, Georg.,) 松村一人訳『小論理学』岩波書店, [上] 1951年 [下] 1952年
- [17] Heilbroner, Robert. and Milberg, William., *The Crisis of Vision in Modern Economics Thought*, Cambridge UP., Cambridge, 1995. 『現代経済学 ビジョンの危機』工藤英明訳 岩波書店, 2003年
- [18] フッサール (Husserl, Edmund.,) 細谷恒夫・木田 元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社, 昭和49年
- [19] フッサール (Husserl, Edmund.,) 長谷川 宏訳『経験と判断』河出書房新社, 1975年
- [20] Hume, David, *A Treatise of Human Nature, being as Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects* (David Hume Philosophical Works, Vol. 1, ed., Green and Grose, Scientia Verlag Aalen, London, 1964). 『人性論』大槻春彦訳 岩波書店, [1] 昭和23年 [2] 昭和24年 [3] 昭和26年 [4] 昭和27年
- [21] カント (Kant, Immanuel.,) 篠田英雄訳『純粹理性批判』岩波書店, [上] 1961年 [中] 1961年 [下] 1962年
- [22] カント (Kant, Immanuel.,) 篠田英雄訳『判断力批判』岩波書店, [上・下] 1964年
- [23] カント (Kant, Immanuel.,) 篠田英雄訳『プロレゴメナ』岩波書店, 1977年
- [24] Kuhn, Thomas., *The Structure of Scientific Revolutions* (2nd enlarged ed.,) Chicago UP., Chicago, 1970. 『科学革命の構造』中山 茂訳 みすず書房, 1971年
- [25] Locke, John., *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford UP., Oxford, 1975. 大槻晴彦訳『人間知性論』岩波書店, [1] 1972年 [2] 1974年 [3] 1976年 [4] 1977年
- [26] 丸山真男『日本の思想』岩波書店, 1961年
- [27] マッカロー (McCulloch, Warren.,) 品川嘉也訳「なぜ心は頭にあるのか」(世界の名著 66『現代の科学Ⅲ』中央公論社, 昭和54年, pp. 479-503)
- [28] Mises, Ludwig., *The Ultimate Foundation of Economic Science: An Essay on Method*, Sheed Andrews and McMeel, Inc., Kansas City, 1978. 『経済科学の根底』村田稔雄訳 日本経済評論社, 2002年
- [29] Mulkay, Michael., *Science and the sociology of knowledge*, George Allen & Unwin Ltd., London, 1979. 『科学と知識社会学』堀 喜望・林 由美子・森 匡史・向井 守・大野道邦共訳 紀伊国屋書店, 1985年
- [30] 仲本章夫『形式論理学入門』創風社, 1987年
- [31] ニーチェ (Nietzsche, Friedrich.,) 『権力への意志 — すべての価値の価値転換の試み —』原佑訳 (ニーチェ全集 第11・12巻) 理想社, [上] 昭和37年 [下] 昭和37年
- [32] 西田幾太郎「認識論における純論理派の主張について」(日本の名著 47『西田幾太郎』中央公論社, 1984年 pp. 234-251)
- [33] 岡ノ谷一夫『さえざり言語起源論 新版 小鳥の歌からヒトの言葉へ』岩波書店, 2010年
- [34] 岡ノ谷一夫『言葉はなぜ生まれたのか』文芸春秋社, 2011年
- [35] 大庭 健『はじめての分析哲学』産業図書, 平成2年
- [36] 大森荘蔵『言語・知覚・世界』岩波書店, 昭和46年

- [37] Peirce, Charles., *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Vol. V & Vol. VI, eds., by C. Hartshorne and P. Well, Harvard UP., Massachusetts 1965. 上山春平訳「論文集」(世界の名著 48 『パース・ジェイムズ・デューイ』中央公論社, 昭和43年, pp. 51-262)
- [38] Popper, Karl., *Objective Knowledge—An Evolutionary Approach—*, Clarendon Press, Oxford. 1972 『客観的知識——進化論的アプローチ——』森 博訳 木鐸社, 1974年
- [39] Quine, Willard., *From a Logical Point of View: Logico-Philosophical Essays*, 2nd revised ed., Harvard UP., Massachusetts, 1961. 『論理的観点から——論理と哲学をめぐる九章』飯田 隆訳 勁草書房, 1992年
- [40] Russell, Bertrand., *The Problems of Philosophy*, Oxford UP., Oxford, 1912. 『哲学入門』生松敬三訳 角川書店, 昭和40年
- [41] Russell, Bertrand., *My Philosophical Development*, George Allen & Unwin Ltd., London, 1959. 『私の哲学の発展』野田又夫訳 みすず書房, 1997年
- [42] Ryle, Gilbert., *The Concept of Mind*, Bannrs & Noble Inc., New York, 1949. 『心の概念』坂本百大・宮下治子・福部浩幸共訳 みすず書房, 1987年
- [43] シュモラー (Schmoller, Gustav.) 田村信一訳『国民経済, 国民経済学および方法』日本経済評論社, 2002年
- [44] ショーペンハウアー (Schopenhauer, Arthur.) 生松敬三・金森誠也共訳「根拠律の四つの根について」(『ショーペンハウアー全集 1』白水社, 1972年)
- [45] ショーペンハウアー (Schopenhauer, Arthur.) 西尾幹二訳「意志と表象としての世界」(世界の名著 続10『ショーペンハウアー』中央公論社, 昭和50年)
- [46] 魚津郁夫『プラグマティズムと現代』放送大学教育振興会, 1997年
- [47] 浦上博達「概念体の構造——経済哲学のための構想——」(『城西大学大学院研究年報』第18号, 城西大学, 2002年, pp. 25-42)
- [48] 浦上博達「概念体の構造(3)——経済哲学のための構想——」(『城西大学大学院研究年報』第20号, 城西大学, 2004年, pp. 11-26)
- [49] 浦上博達「概念体の構造(4)——経済哲学のための構想——」(『城西大学大学院研究年報』第21号, 城西大学, 2005年, pp. 99-122)
- [50] 浦上博達「概念体の構造(8)——経済哲学のための構想——」(『城西大学大学院研究年報』第25号, 城西大学, 2012年, pp. 31-48)
- [51] ヴェーバー (Weber, Max.) 富永祐治・立野保男訳, 折原 浩補訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店, 1998年
- [52] Winch, Peter., *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, Routledge & Kegan Paul, London, 1958. 『社会科学の理念』堀江 洪訳 新曜社, 昭和52年
- [53] ウィトゲンシュタイン (Wittgenstein, Ludwig.) 黒崎 宏訳・解説『ウィトゲンシュタイン『哲学的探求』読解』産業図書, 1997年
- [54] 山田晃弘・杉本大一郎著『科学の思想と論理』放送大学教育振興会, 2001年